

---

# レフリゲリウム物語

くまミニ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レフリゲリウム物語

### 【NZコード】

N7407C

### 【作者名】

くまいい

### 【あらすじ】

それは、小人のラッセンと、病身のアンジェレッタのお話でした。でも…違います。それは、ラッセンとアンジェレッタのお話だったんです。二人は、様々なものに出会いました。そして…その旅は永遠に続く『夢』になつたのです。

# 1・天使の住む家

……真つ暗です。ここには、何も……星だって、見えていないんです。

いつたい、何処なんでしょうか

……ふわっ……

(あつ!)

目の前で、長い髪の毛が揺れています。自分と同じ黒髪をした女の子が、少しずつ離れていくとしているんです。

(あれは……)

駆け始めた後ろ姿が、青白い光に照らされています。ええ、そうです。見間違えるはずもありません……

「姉さん！ エルサ姉さん！」

大きな声で叫んでいるんです。聞こえないはずがないんです。なのに、どうしてエルサ姉さんは立ち止まってくれないんでしょう。「待って！ 僕も行くよ」

……でも、足は少しも動いてくれませんでした。  
(ラッセン、待っててね。すぐにネクトルの実を採つてきてあげるから)

「止めて、エルサ姉さん！」

一瞬、ラッセンはにっこり微笑んでくれるエルサ姉さんを見た気がしました。

その時、真つ暗な闇の中に、大きく光る二つの星が浮かび上がったんです。

……いいえ、星ではありません。あれは……

「危ない！」

ネコの目です。冷たく輝いた、残忍な瞳……

「エルサ姉さん……！」

力いっぱい、ラッセンは叫んでいました。本当に、力いっぱい……

……次に見えたのは、鮮やかな赤い空でした……

「うわああつ！」

粗い生地の掛け布団を握り締めながら、ラッセンは跳ね起きてしましました。体中に、冷たくて気持ちの悪い汗が流れています。……寒いんです。どうしても、体の震えを止める事が出来ません……小さくなってきたベッドの上で、ラッセンは大きく息を吸い込むと、顔を布団に押し付けました。

……駄目です……涙は、布団に吸い込まれるよりも早く溢れています……

しばらく泣き続けた後、ラッセンはよつやく顔を上げる事が出来ました。濡れた黒い瞳が、すぐ横にしつらえたままの、もう一つのベッドに向けられます。天上から吊り下げられたランプの、抑えられた明かりに照らし出されるそのベッドには……もう、眠る人もいないんです……

……また、ラッセンの幼い頬を、白い滴が伝い落ちていきます。ラッセンはきゅっと手を握ると、次にはベッドから飛び降りていきました。そして、そのまま粗末な木の扉を勢いよく開けると、まだ朝の来ない森の中へと走り出します。

……まるで、何かから逃げようとでもするよつとでもするよつと……

遙かな頭上に見えている青葉が、朝一番の光に誘われて緑色に輝き始めています。虫達も、うつすらと森の中に入り込んできた波に気付いて、歌の練習を始めています。そんな彼等をからかうように、小鳥達は見事な轟りをそこかしこで披露し始めました。

……でも、ラッセンにとつて、それらは何の慰めにもならなかつたんです……

古く苔むした切り株を背にして、また少し、泣いてしまいます。

もう、幾度泣き止もうと決心した事でしょう。十歳なんだから、もう、小さい子供みたいに泣いたりしないんだ、って……でも、いつも涙は裏切って流れ出します。

気の早い光の泡が、切り株にある扉の上で踊っています。ぼんやりと、何も考えないように、ラッセンはその泡を視線で追っていました。

その時、不意に上から力強い羽ばたきが聞こえます。でも……ラッセンは、逃げる気もありませんでした。

「……また、眠れなかつたようね、ラッセン……」

優しい声がします。すぐ傍に舞い降りてから、初めてラッセンは瞳を向きました。

赤くて丸い目が、そつと見守ってくれています。羽の縁は赤茶色をしていて、首の両側には青と白の綺麗な模様が編み込まれているんです。その人の中は、自分の背丈の一人分はあるでしょう。いつも気にしてくれる、キジバトさんです。

ラッセンは、頬に付いた涙の跡だけを拭つて、正直に頷きました。キジバトさんは、痛ましそうにそんなラッセンを見ると、小さくテ、ポークと啼いてしばらく切り株の周りを歩き回りました。

「ねえ……ラッセン。どうかしら……引越しをしてみない？」

「……え？」

突然の言葉に、驚いてしまいます。ですが、キジバトさんはどうでも真剣にラッセンを見ていました。

「もう、ここには住めないでしよう？ 辛くなるものばかり、あるんですもの。だから、そういうものは全部ここに置いて、引越しをしてしまうの。人間の家だけど、いい所を知ってるのよ」

「だけど、僕は……」

「重い荷物なら、私が運んあげるわ……ね？ そうしなさいよ」

「キジバトさん……」

じつと、見つめています。引越しだなんて……そんなにすぐ、決められません。確かに、ここには悲しいものばかりがあります。何を

見ても、思い出しちまつんです……でも、それらを全部置いていく  
なんて……

「……僕には、分からない。……考えておくよ。ありがと、キジバト  
さん」

「本当に、考えてみて。私なら、いつでも手伝つてあげるわよ」  
温かな声でそう言つと、キジバトさんは羽を広げて舞い上がりま  
した。

「夕方、また来るわ」

柔らかな言葉が降り注いできます。でもラッセンは、何も応えず  
に飛び去つて、いく後姿を見送るだけでした。

初夏の緑葉の隙間から覗く空が、だんだんと白くなつてきていま  
す。溢れてくる光に乗つて、涼やかな風は草の強い薫りと共にラッ  
センを包み込みました。何だか、とっても新鮮な気分なんです。何  
かが、胸の中で弾けようとしているんです。

ラッセンは小さく頷くと、切り株の扉を開け、辛い思い出ばかり  
の詰まつた家へと入つていきました。

さあ、キジバトさんに運んでもらつた荷物は、これでやつと終わり  
です。ラッセンは、今度は自分の運ぶ荷物をまとめようと家の中に  
入りました。

何だか、ほつかりと空き地が出来たみたいです。エルサ姉さんの  
物は全て置いていくのですが、それでもあちこちに『穴』が見えま  
す。小さな衣装ダンスの跡や、解体したベッドの跡。そこだけが、  
何処か白くて不自然なんです。

（もう、ここは僕の『家』じゃなくなつたんだね……）

ええ、そうなんです。ここは、エルサ姉さんと一緒にラッ  
センが住んでいたんです。それは、『今』の自分とは違うんです……  
溢れそうな涙を感じて、ラッセンは慌てて簡単に荷物をまと

めました。ほとんどの物はキジバトさんが運んでくれましたから、持つていくのは小さな袋一つだけです。しっかりと紐を締め、肩に担ぎ上げると、ラッセンは急ぎ足で扉を抜けようとした。

でもその時、田に入つたんです。残されたベッドの脇にある、机の上の可愛い髪飾りが……

不意に、豊かな黒髪が田に映ります。その黒い流れの中で、髪飾りはそこにある事が当然であるかのように、白く眩しく輝いているんです。これは、ラッセンが何ヶ月もかけて作った物です。とっても喜んでくれたエルサ姉さんは、いつもこの髪飾りを左耳のすぐ上に留めていました。

… そう、あの時も…

（エルサ姉さん…）

駄目です、今にも泣き出してしまいます。ラッセンは歯を食いしばって、敷居を越えようとしました。

… でも、出来ないんです。体が、少しも動いてくれないんです… 必死で耐えようとする心に反して、ラッセンの右手は机の上に伸びていきます。そして、その指先が髪飾りを掴むや否や、ラッセンは外に飛び出していました。

もう、何も言いません。ラッセンはしっかりと握った髪飾りを、黙つて袋の中へと仕舞い込んでしまいました。

大きく、でも少しほつとした溜め息が零れます。今は落ち着いた気分で、ラッセンは扉を閉めてしまいました。

気が付けば、夕暮れ時から始めていたのに、もう朝になろうとしています。愛らしい枝葉の向こうでは、星がうつすらと光を弱めているんです。すぐのでも、朝の早いヒバリは消えかかる星に向かって舞い上がることでしょう。

ラッセンは、改めて草の間から見える、住み慣れた古い切り株を振り返りました。厚い深緑の苔に覆われたこの家とも、今日でお別れです。… もう、一度と戻つてくることはないでしょう… そんな事をすれば、どうしてもエルサ姉さんの事を思い出してしまつので

すから……

もう、泣きたくはないんです。ええ、もう、泣きません……

「……じゃあ、行ってくるね。姉さん」

ロートウ川を越えた所にある、スイールと言ひ名の人間の町に住む事になつたんです。ラッセンにとつては、初めての人間の家です。でも、キジバトさんは何も心配ないと言つてくれています。それに、何よりも大きな屋根がありますし、水も食料もすぐに手に入るんです。一人になつたラッセンには、それはとても大切な事でした。やがて来る冬にも、きっと凍えなくて済むでしょう。

（だから、安心してくれていいんだよ。エルサ姉さん）

一緒に行くんだつたらいいのに……ちらつと、そんな考えが浮かびます。

でも……それは無理な話です……

再び濡れ始めた瞳で、ラッセンは最後にもう一度切り株の扉を眺めるとい、そのまま背中を向けて歩き出しました。

一度も、振り返る事はありません。明日の夕方には、きっと荷物の整理も終わつていいことでしょう。

白いカーテンが、朝の光を受けて輝き出しています。部屋の中にある、たくさんの本が並んだ棚も、もう、ぼんやりと暗がりから見えてきているんです。

アンジュレッタは、いつものようにベッドから起き上がると、静かに淡い黄色の肩掛けをしました。そして、ゆっくりと窓辺に近付いて……そつと、カーテンを引きました。

素晴らしい光の波が、アンジュレッタの純白の寝間着を照らし出します。青白い腕や、細い足も、この時ばかりは健康を取り戻した気がします。

「素敵な青空……」

澄んだ声が、幼い唇の間から流れ出します。アンジエレッタは、微かに笑みを浮かべると、音も無く窓を押し開けました。

クリーム色をした石壁が、金色に燃え上がっています。すがすがしこの氣を胸いっぱいに吸い込むと、アンジエレッタはその黒い瞳をすっと高いところにある窓へと向けました。

もひ、あの窓の下に出歩く事が出来なくなつて……いえ、部屋からさえも出られなくなつて、六年になります。今度の誕生日で、アンジエレッタは十一歳になるんです。氣分が良くて、熱もあまり無ければベッドから出られるんですが……もう、アンジエレッタには、すっかり今の生活が『当たり前』になつてしまつていました。

下の方で、扉の開く音がします。お父さんです。アンジエレッタが良く知っているよひ、今日もその音と一緒に左隣のスコットさんが出てきました。

まだ少し、朝の光を受けるには間がある細い石畳の道で、いつも通りに挨拶をしています。そして、これもいつも通りに、アンジエレッタに帽子を振つてくれました。

「おはよ、スイールの可愛い天使さん！」

「おはよひざこます、スコットさん！」

陽気な言葉に、思わずにつこつてしまします。例え、いつも同じ言葉でも、嬉しいんです。

どんな時でも楽しそうなスコットさんが教会の方へと曲がつてしまつと、今度は前のタックさんの家が動き始めました。その物音が大きくて乱暴だと、いつもアンジエレッタは、はらはらしてしまいます。そんな時は、きっとタックさんとチヨルナさんは喧嘩をしているんです。

ああ、でも今日は大丈夫みたいです。さつと黒い扉が開いて、タックさんが飛び出してくださいました。でも、どんなに急いでいても、必ずタックさんはアンジエレッタを見上げてくれます。

「やあ、おはよ、アンジエレッタ」

「おはよひざこます、タックさん」

「ほら、懲りなよ、あんた！」

威勢のいい声が、追いかけてきます。タックさんはそれを聞くと、慌てて坂を下つていつてしましました。

「おはよう、アンジョレッタ。今日は気分はどうだい？」

「おはよう、アンジョレッタ。今日は氣分はどうだい？」  
家を出てそんなタックさんを見送った後、チエルナさんは優しく尋ねてくれます。アンジョレッタも、そつと微笑んで応えていました。

「ええ、とてもいいんです」

「そりやあ、よかつた。天使はいつも笑つてくれてなくちやね」  
そう言って、豪快に笑い出しています。本当に、びっくりするような人なんです。アンジョレッタは、朝のこの挨拶だけで、どんなに辛い事も夕暮れ時まで忘れていられるんです。

今度は、お父さんです。今日も山に木を伐りに行くんです。

「行つてくるよ、アンジョレッタ。無理はしちゃ駄目だぞ」

「はい、お父さん。行つてらつしゃい、頑張つてね」

何もかもが、いつもと同じなんです。ほら、ヴェルンドさんも、ロートウ川から戻つて…

どうしたんでしょう。少し、俯きかげんです。アンジョレッタは、透き通るような青い瞳を心配で翳らせながら、胸に手を押し当てる待つていました。

「…おはよう！」さこします、ヴェルンドさん」

「ああ、おはよう」

そのまま、坂を上つてしまいそうでしたが、ヴェルンドさんはアンジョレッタの辛そうな顔を見て立ち止まつてくれました。

「今朝は駄目だつたよ、アンジョレッタ。ほとんど魚が獲れなかつたんだ…」

「…今日は、お魚さんの機嫌が悪かつただけです…明日はきっと、たくさん獲れると思います。ヴェルンドさんなら、大丈夫です。だから…元気を出して下さー」

「アンジョレッタ…」

心から、心配しているんです。そんなアンジエレッタの姿は、声に出した以上の事をヴェルンドさんに伝えていました。

ふつと、険しかった顔が優しく緩んでしまいました。ヴェルンドさんは、柔らかな声でアンジエレッタに言いました。

「有り難いことだ。アンジエレッタがそう言つてくれると、明日は本当に獲れそうな気がするよ。やっぱり、アンジエレッタは俺達の天使だな」

「そんな…」

毎日の事ですが、これでは褒められ過ぎとこつものです。  
(わたしなんて、何も出来ないのに…)

アンジエレッタは知らなかつたんです。どれだけ、みんながアンジエレッタの姿に安らぎを得ていいのかを。確かに、病氣で瘦せていますし、元氣だとはとても言えません。でも、『何か』があるんです。

「おはよー、アンジエレッタ。よく眠れたかい？」

外階段のある家から今出てきたばかりのフレッドさんは、かつてみんなに、それはアンジエレッタの真心だと言つていました。

「ありがとうございます、フレッドさん。今日は、気分もいいんです」

「そいつはいいな。よし、じゃあ今日は楽しくなる曲でこいつか」  
綺麗な髪をしたフレッドさんは、すぐに家中に入ると豊琴を持ち出しました。やがて、その指先からは素敵な音色が風に抱かれて広がつてこきます。

アンジエレッタは、温かな手差しにそつと包まれながら、静かに耳を澄ませています。その時、一羽のキジバトさんが、すぐ窓の下にある庇にとまつたんです。この鳥も、フレッドさんが豊琴を奏でてくれてこいる時の常連さんでした。

「キジバトさん。今日は、どんな楽しい出来事を運んでくれるの？」  
いつも、そうです。キジバトさんは灰褐色の首を僅かに傾けて、まるでアンジエレッタの質問に応えてくれるかのように啼いてくれ

るんです。小ちく、そつと優しく…

そんな仕草と『言葉』にて、アンジエレッタの胸は少しどきりとしました。いつたい、どんな楽しい事が起こるんでしょうか?

今日は、ずっと熱が下がったままなんでしょうか。それとも、発作も無くて静かに一日を過ごせるとでしょうか…

ゆつたりとしたフレッドさんの音色は、そんないつもと変わらないアンジエレッタの朝をそつと見守り、清澄な陽光へと溶け込んでいきました。

今日は、ギジバトさんが教えてくれたように、発作も無い穏やかな一日でした。ですから、アンジエレッタは、ベッドの上で窓の外ばかり見ていたんです。

もう、部屋の中は薄暗くなっています。幾つか並ぶ本棚も、ぼんやりと煙って見えるんです。アンジエレッタは、夕陽が残してくれた茜色が全部空から消えてしまつと、小ちく溜め息を吐いてしました。

こつも、そなんです。朝はあんなにも素敵な気分なのに、夕方になると悲しくなつてくるんです。今日も、結局は今までの『毎日』と同じ一日だつたんです…

発作がなくて、気分が良くても…アンジエレッタには本を読むか窓の外を見る事しか出来ませんでした。誰もこの部屋には入れてもらえないので、この六年間というもの、アンジエレッタはお母さんとお父さん、そしてお医者わまとしか近くでお話しする事はなかつたんです。

どんどん、部屋の中も外も暗くなつてこきます。アンジエレッタは、その綺麗に澄んだ青い瞳を悲しみに染めながら、もう一度溜め息を吐いてしまいました。

灯りも点けず、細くて青白い腕を傍の台へと伸ばします。そこには、オルゴールがあるんです。アンジエレッタは、いつも眠る前にはこのオルゴールを聞くようにしていました。とっても悲しくて、

でもとつても透き通つた音楽は、こんな夕暮れのアンジエレッタにぴったりなものなんです。

静かな音色が流れ出します。射し始めた月明かりの中で、銀色の踊り子がゆつくりと回り続けます。

アンジエレッタはじつとその銀色の煌きを追いかけた後、黙つて櫛を手にして背に流れている黒髪を整えました。

やがて…音の葉が緩やかに床へと舞い降りようとすると頃、アンジエレッタはいつもと同じようにベッドの上で目を開じました。

どれくらい、時間が過ぎたんでしょう。ゆつたりとした黄金色の川に身をゆだねていたアンジエレッタは、何か微かな物音に気付き、その可愛らしい瞳をうつすらと開けました。

(……！)

…床の上…あれは、何でしょう。窓から射し込んでくる銀の月の光の中で、黒くて小さな影が踊つているんです。古く色褪せた床板が青く輝いている中で、その影はただひたすらに舞い踊つていました。

ベッドに横になつたままで、アンジエレッタは息をする事も忘れてしまします。…これは、『夢』なんでしょうか？

熱の下がつた日にだけ掃除する床の上で、影はくるくると滑つています。とても素早いんです。もう、今ではアンジエレッタにも分かつていました。その小さな影は……人間と同じ姿をしているんですね。小人なんです！

自分に良く似た、濃い黒髪をしています。短いその髪の毛の下からは、ときどき円明かりに照らされて鼻や口までが見えているんですね。

…でも……どうしてか、アンジエレッタにはその小人が悲しんでいるように思えました。とても素晴らしい踊りをしているのに、何

処か寂しそうなんです。

いつしか、アンジエレッタの目は深い哀しみに彩られていきました。その小人は、自分よりも少しだけ年下のよう見えます。アンジエレッタは、その辛そうな様子に思わず口を開いて声をかけようとしたが、もう少しのところで止めてしまいました。だって…恐がらせたくはなかつたんです。きっと、この小人の男の子は、自分が目を覚ましているなんて思つてもいないでしょ。

その時、急に空の月が雲に隠されてしまいました。窓の形に切り取られた床の上の光も陰り、消えていこうとしています。銀色の波が引いていくと、小人は踊り舞う事を止め、とぼとぼと部屋の隅へと歩き出していました。

じつと、優しさに満ちた瞳が追いかけます。その小さな男の子は、やがて本棚の隙間にあつた古いネズミの穴に入つてしまい、もうそれからは戻つてきませんでした。

しばらくの間、動く事が出来ません。ベッドの上で身を支えながら、アンジエレッタは大きく息を吸い込んで…そして、ほーっと吐き出しました。青白かった顔は、ここ何年間も見られなかつたらいに明るく輝いています。とつても素敵な事が起こつたんです。ぜひとも、アンジエレッタはあの小人の男の子とお友達になろうと決めてしまいました。

（明日の夜も、来てくれるかしら…）

やつれた頬に嬉しそうな笑みを浮かべて、もう一度アンジエレッタは眠ろうと横になりました。そつと、目を閉じます。

…月の光が床の上に戻つてきた時、その小さな唇の間からは、安らかな寝息が漏れていきました。

さあ、ようやく朝になりました。いつものように、アンジエレッタは肩掛けをすると、窓辺に近寄り外を眺めました。

スコットさんが、お父さんと挨拶を交わしています。昨日と全く同じように風景は流れているんです。ほら、ヴェルンドさんも今日

は嬉しそうな顔で話しかけてくれます。アンジェレッタは、素直な喜びと共にそんなヴォルンドさんを坂の上まで見送りました。

でも、やつぱり何かが違うんです。いつもと同じようにフレッドさんは豊琴を奏でてくれます。あのキジバトさんもその傍で耳を傾けています。でも、やつぱり何もかもが違つて見えています。フレッドさんにお礼を言つて部屋の中を振り返つた時、アンジェレッタはちょっと心配そうに本棚の隙間に視線を送りました。

昨夜の小人の姿が、鮮やかにみがえつてきます。心配そつだつたアンジェレッタの頬にも、知らずに優しい微笑みが浮かび上がつていました。

どうすれば、あの男の子とお友達になれるでしょう。白い寝間着のままでベッドに戻つた後も、ずっと考え続けます。でも、あまりいい考えは浮かんできません。

ずっと、ずっと真剣に考え続けます。お母さんが、とても気分の良さそうなアンジェレッタに驚きながら朝食を用意している間も、昼食の片付けが終わつた後も、まだアンジェレッタは考えていました。

あれもこれも…やつてみたい事はたくさんあります。でも、驚かせてしまつて、もう会えなくなつては困ります。アンジェレッタは、あの小人の男の子とお友達になりたいだけなんですもの。

夕食が並ぶ頃になつて、ようやくアンジェレッタは決めました。ちょっとだけパンをちぎつて、オルゴールの乗つた台の引き出しに隠してしまいます。それから小さな可愛い紙を取り出して、アンジェレッタはそこに細い文字を書き始めました。

少し悩みましたが、すぐにペンを置きます。一度だけ読み返した後、アンジェレッタは満足そうにくすくすと笑い出しました。これなら、きっと怒らせたり、怖がらせたりしないはずです。

その紙もパンと一緒に仕舞つてしまつと、アンジェレッタはベッドの上から窓の外を眺めてどきどき胸を高鳴らせていました。

本当に、お友達になれるでしょうか…

夕食を、お母さんが片付けてしまいます。その足音が階下に消えてしまつと、びっくりさせないように今まで近寄らないでいたネズミの穴に、アンジェレッタはそつと近付いていきました。

本棚の隙間、ネズミの穴の入り口に、さつき隠したパンと紙を静かに置きます。

（あの小人さんが、読んでくれますよ[...]）

小さな胸でそう願いながら、アンジェレッタは再びベッドに戻つて横になりました。

お父さんが、お母さんと一緒にお休みを言いに来てくれます。その後で、灯りが消されます。

今日は、長く起きていてはいけません。目が覚めている事に気付いたら、きっと小人の男の子は出てくれないでしょう。でも…困った事に、そう思えば思うほど、眠れなくなつてしまふんです。

アンジェレッタは、温かな微笑みと共に、明日起こつているかも知れない出来事を思い浮かべていました。

しばらくして……月は窓からそつと部屋の中を覗き込んでいました。その柔らかな銀の光が、暗闇の中の可愛い寝顔を浮かび上がらせています。

オルゴールを聞く事も忘れ、ようやく眠りに就いたアンジェレッタの頬には、優しい微笑が残つたままでした。

.....

.....駄目です。せつかく新しい家に引っ越してきたのに！

.....一人で、部屋の中にはいる事が出来ないんです。新しい家は、一人で住むには少しばかり大きくて……田は、どうしてもエルサ姉さんがいたかも知れない場所に向いてしまつんです……

いるはずがない事は、よく分かっています。昼の間は、食料を集めに行つたりして忘れる事も出来るんですが……夜、一人になると、

どうしても思い出してしまうんです。

「エルサ姉さん……」

ずっと、一人で暮らしてきたのに……どうして、エルサ姉さんは自分を残していつてしまつたんでしょう……

ラッセンは深くて重い溜め息を吐くと、作りたての椅子から腰を上げました。今夜も、あの女の子はぐつすりと眠つていることでしょう。少しだけなら、人間の住む部屋に入つても危険はないはずです。それに、キジバトさんもあの子にだけは、例え見付かつても大丈夫だと言つてくれていました。

新しく付けた扉を抜けて、少し湿り気のある段を一階へと上つて行きます。随分と遠いのですが、一階で暮らす人間の世界に入るよりは安全なんです。しかも、その部屋へと続く壁には、ちょうどいい大きさの穴をネズミが開けておいてくれていました。

「あれ？」

その出口を、何かが塞いでいます。どこかのネズミが引っ越してきたんでしょうか。それとも、ネコでしょうか……

素早く、階段の隅に身を潜めます。でも、少しも黒い物体は動こうとはしません。風も動きませんから、呼吸もしていなようです。独特の臭いや低い唸り声も、ラッセンには感じ取る事が出来ませんでした。

しばらくの間待つていましたが、ようやく少しづつラッセンは動き始めました。用心しながら、一段ずつ近寄つて行きます。あの人の女の子が、何かを本棚の隙間に落としたんでしょうか。そう言え吧、いつもはほとんどベッドから動こうとしないのに、今日はとつても気分良さそうに歩いていましたつけ。

（何か、便利な物だつたらいいな）

出口までもう少しという所で、不意にラッセンは足を止めました。甘い香りが漂つてきたんです。今はもう、ラッセンにも分かりました。あれは、大きなパンの塊なんです。

慌てて走り出そうとしたんですが、その動きは途中で止まつてしま

まいります。ラッセンは、少し厳しい目でその黒い影を見つめています。どこかに、罠があるかも知れません。

でも…どれだけ目をこらしても、床の上にあるのは自分と同じくらい大きなパンと、一枚の紙切れだけでした。

そつと、音も無くラッセンは部屋の中に出ました。慎重に辺りを見回した後、まず、紙の方へと近寄ります。窓辺から射し込んでくる淡い月の光でも、そこに書かれた文字は読む事が出来ます。人間の言葉と文字を知っているラッセンは、その紙に書かれてある内容を、小さく声に出して読み上げました。

「昨日は、素敵な踊りを見せてくれて、ありがとうございます。あなたに会えて、とても嬉しかったんです。贈り物を受け取つてもらえますか？わたしの名前はアンジェレッタです。あなたの名前も、どうか教えて下さい」

しばらくの間、何も言えません。とっても、とっても驚いていたんです。まさか、人間の女の子に見られていたなんて…しかも、贈り物までくれるなんて…

人間は、とっても危険な動物です。いつも、罠を仕掛けて小人を捕まえようとするんです。そんな恐い話を、何度も聞かされてきたことでしょ。このパンの中にも、毒が入っているかも知れないんです…

ラッセンは、それでもパンの方に近付きました。その影から、女の子のベッドを見てみます。でも、アンジェレッタは、今日は眠つているようでした。

緊張と恐怖の入り交じった顔で、今度はパンを見上げます。本当に、食べても大丈夫なんでしょうか。キジバトさんは、アンジェレッタはとても優しくて素敵な子だと言つていました。ラッセンがこの一週間見てきた限りでも、あの女の子は自分を捕まえるような人間には見えないです。

そつと、ラッセンは腕を伸ばしました。

…少しだけ、ちぎつてみます。

ひとしきり、その欠けらを見回した後、体中を細かく震わせながら、ラッセンはそのパンを口に入れてしまいました。

しばらく、待ってみます……

でも、何も起こりません。やつぱり、これは本当の贈り物だつたんです。ラッセンは喜んで飛び跳ねると、急いでその贈り物を小さくし、下の自分の家へと運び始めました。

大きなものでしたから、全てを運ぶのは一苦労です。でも、それも終わると、ラッセンは今度は布に包んだ大きな炭の欠けらを両手で抱えて、女の子の部屋に向きました。

アンジェレッタの書いてくれたお手紙には、まだ下の方に余白が残っています。ラッセンは、そこに歩きながら力を込めて、一生懸命文字を書きました。

「おいしいパンを、ありがとうございます。僕の名前は、ラッセンです」少し字が曲がっていますが、人間の大きさに合わせるんですから仕方無いでしょう。ラッセンは一度読み返した後、満足そうに大きく頷きました。

もう、今夜は踊らなくてもいいでしょう。いいえ。ラッセンは、もう踊りに来た事なんて忘れていいんです。さつきまでの悲しみなんて全て洗い流して、ラッセンはパンが待つ家へと戻つて行きました。

まだ、朝の光は地平から覗いてはいません。ロートウ川で漁をしているヴエルンドさんだつて、網を上げ終えてはいないでしょう。でも、それでも待ちきれずに、アンジェレッタはベッドから起き出してしまいました。

今まで、何年間も見せた事が無いほどに、生き生きとした目をしています。まるで、病氣である事など忘れているかのようです。熱も下がり、気分がいい日にだけベッドから出る事を許されているん

ですが…

薄明かりの中、ぱつと見ただけでパンが無くなっている事が分かれます。嬉しくて幸せな笑顔が、抑えられずに満面に広がってしまいます。でも、弱つた足では小走りすら出来ません。心は急ぎながらも、それでも無理せずにアンジェレッタは静かにネズミの穴の前まで歩み寄りました。

お手紙は、昨日のままに残されています。あの小人は、文字が読めなかつたんでしょうか。もしかすると、お話をする事も出来ないのかも知れません…

でも、それでもお友達にはなりたいんです。アンジェレッタはしなやかな、やせた指先でその紙を拾い上げました。すると、驚いた事に何かが力強い線で書き加えられているんです。

「おいしいパンを、ありがとう。僕の名前は、ラッセンです」

もう、どうしようもなく嬉しくて……アンジェレッタは、紙を両手で強く胸元に押し付けてしました。『夢』ではなかつたんです。月明かりに踊りを舞つっていた小人は、本当にいてくれたんですね！

でも、アンジェレッタは隙間に向かつて話しかけようとはしませんでした。ラッセンが眠つているかも知れないからです。それに、まだ姿を見せたくないのかも知れません。ですから、アンジェレッタは決めました。今夜、もう一度お手紙を書くんです。そして、明日の朝、会つてお話をしてくれるよう頼んでみるつもりです。

『夢』でない事がはつきりした今、いつもはおとなしくて物静かなアンジェレッタも、どきどきしてじつと外なんて見ていられませんでした。大好きな本を読んでも、ちつとも集中出来ないんです。早く、夜になつてもらいたいんですが… こればかりは、どうしようもありません。

すっかり、アンジェレッタは熱がある事なんて忘れてしまつていました。

小人のラッセンのために、今日はチーズを一切れ引き出しに隠しました。

ておきます。お手紙も、もう何度も何度も書き直してしまいました。

明田の朝、本郷にトッセンは急に来てくれるでしょうか…

ようやく訪れた夕暮れの中で、アンジエレッタはお手紙とチーズの欠けらを穴の傍に置きました。そして、ベッドまで静かに戻ると、期待と不安の入り交じった幼い胸で、掛け布団の中に潜り込んでしまいます。

オルゴールは、今夜も音色を奏でる事無く、静かにたたずんでいました……

今夜は、悲しみからではなく、興味と期待からラッセンは一階へと向かっていました。

アンジェレッタは、あの返事を読んでくれたでしょうか。今日の  
廻聞は、何とかその返心を見るのが懸くて、ずっと待ててました

アンジエレッタの部屋にもう少しの所で、不意に素晴らしい香りが漂ってきました。この香りは……チーズです！ ラッセンは、もう用心なんて忘れて、最後のいくつかの段を駆け上ってしましました。

薄く流れる闇の中に、運びやすい大きさのチーズが見えています。その傍には、今度も可愛らしい花柄をした紙が添えられていたんですね。ラッセンは、昨日と同じようにまずそのお手紙を読み始めました。

「ラッセン、お名前を教えてくれてありがとう。本当に嬉しくて、なんて書けばいいのかよく分かりません。お願いです、ラッセン。明日の朝、会いに来てくれませんか？ 誰もいなくなれば、合図にオルゴールを鳴らします。もしよければ、お友達になつてもらいたいんです。わがままなお願いだつて分かつています。でも、お願い

です、ラッセン。

待つています

ラッセンは、何度も何度もそのお手紙を読みました。綺麗で素直な字と、そこに流れる大きな想い…優しさと寂しさが、どちらもよく伝わってくるんです。

でも、今夜は返事も書かずに、ラッセンはチーズだけを持って部屋に戻ってしまいました。

誰もいなくなつた床の上を、月の光は銀色に照らし出していくまです。もう、ラッセンはその光の中で踊る必要は無さそうでした。

とてもがっかりした事に、お手紙に返事は書かれていませんでした。でも、チーズは無くなつているんです。アンジョレッタは、黙つてそのお手紙を引き出しじにしあつと、朝食のパンもまた一切隠しました。

ラッセンは、お手紙を読んでくれていないのかも知れません。いえ、昨日はラッセンが来ずに、ネズミにチーズを持つて行かれたかも知れません。

それでも、アンジョレッタは合図をしてみるつもりでした。今日が駄目でも、明日も明後日もあるんです。これからも毎晩、同じ手紙を置いておけば…いつかは…

今日は、スイールの隣町から来たお医者さまで検診してもらつています。いつもと同じように、お医者さまは優しく声をかけてくれました。そして、同じ薬を調合してくれたんです。

よつやく、そのお医者さまの馬車の音も、石畳から消えてしまいました。これで、もう毎晩の準備までは誰も部屋に入つてこないはずです。いよいよ、合図をする時が来たんです。

こんなに、じきじきする事が病気になつてからあつたでしょうか。もう、六年間も同じ事を続けてきた生活に、『何か』が加わるうと

しているんです。

太陽の下で遊ぶ事のない腕は、少し震えながら台の上のオルゴール人形を引き寄せました。大きく、深く息を吸い込んで……アンジェレッタは、そつと、人形の足下にあるネジを巻き始めました。銀色の踊り子が、初めて陽光の下でゆっくりと回転していきます。その動きに合わせて、オルゴールからはとても悲しく静かな音色が流れ出してきました。

何かを諦めさせるような……そんな、物悲しい音楽です。でも、今日は違うんです。それは、何かの予感を秘めているようでした。

ふと、この微かな音色が本棚の隙間の穴の奥まで聞こえるのか、不安になってしまいます。でも、アンジェレッタには、古いネズミの穴まで近付く勇気も無かつたんです。

アンジェレッタはベッドに腰掛けたまま、黙つてじつと待ち続けました。

(……！)

今、何かが隙間から飛び出した気がします。でも、ずっと待つていたんですが、何も姿を見せてはくれません。違つたのでしょうか。もうすぐ、オルゴールも止まってしまいます。澄み切つた音楽が部屋の中を満たす後ろから、小鳥達の歌声が聞こえてくるんです。……やっぱり、ラッセンはあのお手紙を読んでくれなかつたんでしょう……

アンジェレッタは、とてもがっかりしていました。……いいえ、とつても悲しかつたんです。本当に、その青い瞳にはうつすらと涙が溢れきました。

青白い頬を、一粒の美しい滴が伝い落ちていきます……

「泣かないで！ アンジェレッタ……」

急に、アンジェレッタの耳に小さな男の子の声が飛び込んできました。驚いて床の上を見ると、そこにはあの黒髪をした小人の男の子が立っていました。大きな黒い瞳が、自分を見上げているんです！

「ラッセン……！」

嬉しくて、嬉しくて…少しの間、何も話す事が出来ません。いいえ、ラッセンにしても、今までに無い経験で何を言えばいいのか戸惑っているんです。

でも、幾度か唇を濡らせた後で、やつと「ラッセンは彼女に笑いかけていました。

「あの…アンジョレッタ。あんなに素敵な贈り物をありがとうございます。」「うん…ラッセン。わたしの方こそ、とても素敵な踊りを見せてもらつたんだもの。逢いに来てくれてありがとうございます。本当に、ありがとうございます。」

この新しいお友達に、もっともっと色々な事を話したいんですが…困った事に、何も声には出来ないんです。ついさっきまでは、言いたい事が次から次へと浮かんできていたのに…不思議な事です。アンジョレッタはオルゴールを台に戻すと、白い寝間着のままでそつとベッドから降り、小人の前にひざまずきました。

「…ラッセン。わたし、初めて見た時からお友達になりたかったの…今日は、お話をしてもいいのね…？」

「うん、いいよ。じゃあ…その台の上まで運んでくれないかな。その方が話しやすいからね」

「触つても…いいの？」

気遣うような表情をしています。でも、そんな優しいアンジョレッタに、ラッセンは大きく頷きました。

本当は、やつぱりラッセンでも、あんな高い所まで運ばれるなんて、恐いんです。それに、アンジョレッタが捕まえようとしたら、自分はどうしたらいいのでしょうか…

でも、ラッセンはさつきのアンジョレッタの涙を見ていました。この女の子なら、大丈夫です。きっと、素晴らしいお友達になれます。きっと…

そつと、ラッセンの体をアンジョレッタの柔らかな指が包み込みます。小人の男の子の体を、アンジョレッタは本当にゆっくりと台の上まで運びました。そして、自分も再びベッドに腰掛けます。こ

うすれば、一人は楽に話をする事が出来るでしょう。

アンジェレッタが指を開くと、中から驚いた顔でラッセンが見上げていました。

「アンジェレッタの手… とっても、熱いんだね」

その言葉に、アンジェレッタは少し寂しそうに頷きました。

「ええ…わたし、いつも熱があるので。だから、部屋を歩けるのも気分がいい時だけで、もう、何年も部屋の外に出ていないわ…」

「そうだったんだ…」

ラッセンには考えられない事です。ずっと、ずっと部屋の中にしかいられないなんて…

「ラッセン…」

黙つてしまつた小人に、アンジェレッタはどうしても聞きたいと思つていた事を口にしようとした。

「何？」

少し、もじもじしてしまいます。話す事は簡単に思えるのですが… もしかすると、傷付けてしまつかも知れません。

でも、ラッセンの事を大事に思つからこそ、アンジェレッタは小さな声で尋ねていました。

「あの… もしよかつたら、教えてもらいたいの… わたしが月の夜に見た時… ラッセン、とても寂しそうだったの…」

…ええ…勿論、そうだったでしよう…

それ以上は、さすがに声に出来ません。でも、心配している『言葉』は音も無く伝わってきます。そんなアンジェレッタに、ラッセンは静かに微笑んで言いました。

「ありがとう、アンジェレッタ。アンジェレッタって、優しいんだね…

僕はね、少し前まで森の中の古い切り株に住んでいたんだ。… ハルサ姉さんと一緒に… ね…

「お姉さまがいるの？」

問いかけるアンジェレッタに、ラッセンは力無く首を左右に振り

ました…

「……いたんだよ…」

「え?」

心から、心配そうにアンジェレッタが顔を曇らせていました。ラッセンは、そんな人間の女の子に、にこりと悲しい笑みを向けました。  
「…ネコにやられたんだ…僕の目の前で…悲鳴がして…」

「そんな…！」

みるみるうちに、アンジェレッタの青い瞳には涙が溢れます。美しく澄んだ涙は、やつれた頬に幾つもの筋を描き出し、次々と流れ落ちていきます。

「…僕は、独りになつたんだ。だから、引っ越しをして…どうしても置いていけなかつた髪飾りだけを持ち出したんだ…でも、やつぱり、エルサ姉さんの事は忘れられなくて…思い出してしまつんだ、あの時の事を…だから、そんな悲しみをどこかに捨てようとして…アンジェレッタの部屋を借りてたんだよ…」

ラッセンは、とても静かな口調で話しています。それが、いつそうアンジェレッタの小さな胸を悲しませるんです。アンジェレッタは、強く握り締めた両の拳を胸に押し付けて、何も言えずに、ただ辛くて涙を流し続けていました。

ラッセンも、それ以上はもう語れません。でも、自分のために、姉さんのために泣いてくれる人間を見上げると、やがて、そつと口を開きました。

「…ありがとう、アンジェレッタ…」

少女は、ただ、頭を振り続けるだけでした…

しゃくりあげる声も、少しづつ小さくなつていきます。ラッセンは、この心優しい女の子に対して、明るい笑顔を見せようと頑張りました。

「だから、あの贈り物はとつても嬉しかつたんだよ。一人で食料を手に入れるのは難しいし、危険もあるからね」

アンジエレッタにも、ラッセンが自分を気遣つてくれている事がよく分かるんです。ですから、彼女も一生懸命微笑もうとしました。  
「…そんなに喜んでもらえるなんて…ありがとうございます、ラッセン。ちょっと、待つてね…」

まだ涙に濡れている顔で、アンジエレッタはラッセンの足下にある引き出しを開けました。

「はい…これで、足りるかしら…」

取り出される一切れのパンに、ラッセンは思わず飛び上がります。

「僕にくれるの?」

「ええ」

「ありがとうございます！ 充分ですよ、アンジエレッタ。今までの贈り物だけで、もう何日も食料を集めに行かなくて済むからね」  
小人のラッセンからしてみれば、とても大きな欠けらなんです。そのパンの塊を抱え込んだラッセンを見ながら、少しだけ、アンジエレッタは羨ましそうな目をしていました。

もう、アンジエレッタには一度と外を歩く事など出来ないんです  
…多分、神様が迎え入れて下さるまで… 一度と…

「アンジエレッタ…」

真剣な声がします。浮かれていた顔を引き締めるラッセンに、アンジエレッタはぽつりと呟きました。

「…わたしには、もう、外がどんな世界か分からなくなっているの… わたしが歩けるのは、あそこに並んでいる本の中だけだもの…」  
「アンジエレッタ…」

真面目な顔で、ラッセンは少女を見上げると言いました。

「じゃあ、僕がアンジエレッタの目や耳になるよ。アンジエレッタの代わりに、外の世界の事をたくさん見て、話してあげる… 僕には、そんな事くらいしか出来そうにないんだけど…」

「ラッセン…！ ジゃあ…毎日、逢いに来てくれるの…？」

「アンジエレッタが構わないならね」

勿論、構いませんとも！ アンジェレッタは、嬉しくてまた少し泣いてしました。ラッセンは、これからずっと会いに来てくれるんです。一緒にお話をしてくれるんです。

「ありがとうございます、ラッセン……わたし達、お友達よね……？」

「そうだよ、アンジェレッタ。よろしくね！」

につっこりと笑いかけてくれます。アンジェレッタも、そんなラッセンにとても素晴らしい、天使のような笑顔を見せていました。

窓の外では、いつもと変わらない暮らしが流れています。でも、アンジェレッタにとつてもラッセンにとつても、今、『何か』が変わったんです。一人がいるこの部屋の中では、今や新しい『時間』が始まっています。

『天使の住む家』 おわり

藍色をした東の空が、次第に白く柔らかく溶けていきます。やがて、そこは金紅色に燃え上がり……不意に、最初の光の矢が地平から放たれました。

矢は、まずスイールの町で一番大きくて目につく教会の塔に輝きを与えます。そして、後からどんどん続いてくる光の波によつて、教会が金色に染め上げられる頃、町の北にある崖と公園墓地が朝を迎えていました。

毎朝、太陽は次々に立ち並ぶ家を美しく輝かせてくれるんです。どの家にも、そこに住む人々がどんな生き方や暮らしをしていても、全てに等しく、太陽は光を投げかけています。勿論、アンジェレッタの家にも…

「……」

ロートウ川が澄み渡つた青空を映し出した時、アンジェレッタはベッドの上で少し身を動かしていました。

「おはよう、アンジェレッタ」

温かな言葉が聞こえきます。アンジェレッタは、その声にうつすらと目を開けると、話しかけてくれた小人の男の子ににっこりと微笑みました。

「おはよう、ラッセン」

床の上でカーテン越しの朝の光を浴びていたラッセンは、上半身を起こしたアンジェレッタに笑い返してくれます。

あれから、毎日ラッセンはアンジェレッタに逢いに来ていきました。もう、すっかり一人とも悲しみの影を追い払っています。アンジェレッタのお母さんが、最近のアンジェレッタの楽しそうな様子に驚いているほどの変わりようなんです。

「気分は良さそうなんだけど…無理をしてないかしら…」

一度だけ、お母さんがそう呟いた事があります。なにしろ、アン

ジエレッタは恐らく治らないだろう病気なんですから……

…でも、ラッセンもアンジェレッタも、もつすつかり、その事を

忘れてしまつていました……

「アンジェレッタ。十二歳の誕生日、おめでとう!」

ラッセンは、誰よりも一番にそう言ってあげようと、ずっと前から決めていました。ですから、こうしてアンジェレッタの目覚めを待っていたんです。そんなラッセンの言葉に、アンジェレッタは幸せそうに頬を染めてしまいました。

「ありがとう、ラッセン」

お気に入りの黄色い肩掛けをして、アンジェレッタはベッドから起き上りました。雪のように白くて細い素足が、とても頼りなく感じます。無理をせず、ゆっくりとした足取りでラッセンの傍に近付くと、アンジェレッタは彼を優しくそっと手で包み込んでしました。

こんな特別な朝に、一番に出逢えたのがラッセンでよかったです。アンジェレッタは、本当に嬉しかったんです。どうにかして、そんな気持ちを伝えたいんですが……困った事に、嬉しい気持ちがいっぱいすぎて、何も声にならうとしないんです。

「…アンジェレッタ」

小さな手が、そつと指を握り締めてくれます。アンジェレッタは、そんなラッセンに可愛らしい笑顔で応えると、そのまま彼を抱き上げました。

きつと…ええ、きつと、こんな時は何も言わなくてもいいんです。きつと……

アンジェレッタは、そのまま窓辺まで小人の男の子を運んであげました。そして、朝の透明な光をいっぱいに浴びているカーテンを引きました。

窓ガラスを通して、夏の白い陽光が流れ込んできます。その波はアンジェレッタの白い手足を輝かせ、まるで彼女の体から光が射しているように見えるんです。ラッセンは、思わずこの人間のお友達

をびっくりした顔で見上げてしまいました。

アンジエレッタは、そんなラッセンにも気付かず、窓を大きく開け放しています。その瞬間、爽やかな風が彼女の豊かな黒髪をなびかせ、白い寝間着の上で踊りました。

「あつ…」

その時、アンジエレッタの家の扉が開いて、向かいのチョルナさんが出てきたんです。こんなに朝早くから、どうしたんでしょう？

「おはようございます、チョルナさん」

「やあ、おはよう、アンジエレッタ。もう起きてたのかい？」

「ええ…だつて、今日は特別な日なんですもの」

ちらりと、窓の横に隠れているラッセンを見てします。

「そうだつたね。誕生日おめでとう、アンジエレッタ。今、お母さんにプレゼントを渡しといたからね。後で見ておくれ」

「チョルナさん、いつも、ありがとうございます…わたし、何もお返しする事が出来ないのに…」

辛そうに青い瞳を翳らせるアンジエレッタに、チョルナさんは大きく笑い声を上げていきました。

「そんな事、気にするんじゃないよ。それにね、あたし達はいつでも贈り物をいだいてるよ。アンジエレッタがそこで毎朝笑ってくれているだけで、とても幸せな気分になれるんだからね」

「そんな…」

嬉しいんです。とつても嬉しいんです…

「この頃、とても気分が良さそうだけど、無理はしないでおくれよ？ アンジエレッタ。いつまでも、そこでそうして笑っていてくれ

れ

そう言って、チョルナさんは家に戻つてしましました。

「…アンジエレッタは、本当にみんなに慕われてるんだね  
ラッセンも、アンジエレッタと同じくらい嬉しいんです。アンジエレッタがこんなにもみんなから愛されていて、本当に嬉しかったんです。」

スコットさんも、タックさんも、ヴォルンドさんも、フレッドさんも、みんな、アンジエレッタにおめでとうを言ってくれます。その度に、ラッセンも自分の事のように喜んでいました。

「でもね、今日は、いつもの誕生日よりも嬉しいの……」みんなと挨拶を交わし、フレッドさんが作ってくれた誕生日の曲に心からお礼を言った後、アンジエレッタはラッセンを振り返りました。

「だつて、こうしてラッセンがいてくれるんだもの……ありがとう、ラッセン。いつも、こうして会いに来てくれる……」

「僕だつて、アンジエレッタと友達になれて嬉しいんだからね。毎日、アンジエレッタとこるだけで楽しくて……うまく言えないけど、もつともつと、たくさん思つてんだよ」

「ありがとう……」

……アンジエレッタは、思つていました。もう、これがここで迎える最後の誕生日かも知れない……そんな日こそ、ラッセンが傍にいてくれて本当に良かつた、つて……

「ねえ、アンジエレッタ。下ろしてくれる?」

「ええ

床に降りると、すぐこラッセンは本棚の隙間に走り込んでしまいました。

「ラッセン?」

どうしたんでしょう。まだ、お母さんは上がりきらつてもないんです。

アンジエレッタが古いネズミの穴まで近付いてみると、その穴からラッセンが何かを押し出そうと頑張っていました。

「ちょっと、待つてね」

苦しそうな息の下でそう言いながら、ラッセンはよがへ自分よりも大きな箱を入り口から出していました。少しづじれていますが、綺麗なリボンが結ばれているんです。

「僕には、こんな事しか出来ないんだけ… 良かつたら、受け取つてくれないかな」

「ラッセン…！」

まさか、ラッセンからプレゼントをもらひえるなんて思つてもいいな  
かつたんです。アンジョレッタにしてみれば、ラッセンが傍にいて  
くれるだけ、一緒にお話をしてくれるだけで、それだけでもう充  
分な贈り物だつたんですもの。

「ありがとう、本当に、ありがとう…」

おかしなものです。何だか、とっても泣きたいんです。嬉しいの  
に、涙が溢れてくるんです…

「ほら、泣かないで。せっかくの誕生日なんだからねー！」

「ええ…」

アンジョレッタは、濡れた瞳でそつと微笑みました。とっても綺  
麗な、優しい笑顔なんです… それは、ラッセンにはお返しが過ぎる  
と思えるほどでした。

「…開けてもいいの？」

「いいよ。似てないかも知れないけど…」

ちょっと恥ずかしそうに、ラッセンはアンジョレッタから目を逸  
らしました。一生懸命、頑張つたつもりです。でも、どこか自分の  
感じているものとは違うんです。いいえ、想つているものに近付け  
なかつたんです…

アンジョレッタは、その細く透き通るような指先をリボンにかけ  
ました。ラッセンが、必死になつて結んでくれたのが良く分かるん  
です。ですから、そつと、大事にアンジョレッタはそのリボンを解  
きました。

ちょっと、じきじきしながら箱を開けます。中のものを静かに取  
り出した瞬間、アンジョレッタは驚いて目を大きく見開いてしま  
いました。

中に入っていたものは、小さなアンジョレッタだつたんです。夕  
陽色の素晴らしい石を彫つて創られた、とても細かくて、見事な像

だつたんです。

「わたし…なんて言えぱいいのか分からぬの…こんなにも嬉しいのに…」

微かに震える声と共に、ラッセンに向けられた青い瞳は僅かに濡れています。ラッセンは、そんなアンジェレッタを真つ直ぐに見上げると、静かに微笑みました。

「ありがと…アンジェレッタの今の姿だけで、僕にはもう充分だよ…」

「ラッセン…」

何度も何度も、アンジェレッタは小さく頷いていました。

朝の清澄な日差しは、そんなアンジェレッタを優しく包み込んで暖めてくれます。今、アンジェレッタは確かに『特別』な『時間』の中に抱かれていました。

翌日は、お医者さまの検診があつたので、誰も部屋にいなくなつてから、アンジェレッタがオルゴールを鳴らしてくれることになりました。でも、いくら待つても階下のラッセンにはオルゴールの音色が聞こえてこないんです。いいえ、お医者さまの馬車も、ずっと玄関先で留まつたまま走り去ろうとはしていません。

何か、嫌な予感がします。今まで、別に意識をしていなかつたんですが、確かにアンジェレッタは病気なんです。ラッセンは、それ以上待つていられずに、立ち上がると扉を抜け一階に向かいました。

ネズミが開けてくれた入り口に近付いた時、お医者さまの厳しい声がラッセンの耳に飛び込んできました。

「今は、これ以上出来ません。急いで薬を取つてしましょう。すぐに熱を下げる、危険な事になります」

(何だつて?)

ラッセンは驚いて本棚の影まで飛び出していました。昨日まではあんなに元気だったのに、アンジェレッタの苦しそうな呼吸がここ

まで聞こえてくるんです。微かなうわー」と耳にした瞬間、ラッセンの胸は強く締め付けられました。自分自身も息が出来なくなつたかのようだ、苦しくなつてくるんです。胸の奥が痛いんです。

(アンジェレッタ…！)

いつたい、小人の自分に何が出来るでしょ。お友達が苦しんでいるのを、黙つて見ている事しか出来ないんでしょ。つか、

「先生、アンジェレッタだけは助けてください！ お願いします、アンジェレッタだけは…」

取り乱しているお母さんは、お医者さまの腕を必死になつて掴んでいます。でも、お医者さまは落ち着いた声で言い聞かせました。

「大丈夫。解熱剤を取つてくれば、熱も下がり、発作もおさまりますよ」

「お願いします… フイオラが死んで、アンジェレッタまでもいなくなつたら… もう…」

お母さんは、床に座り込むと激しく泣き出してしまいました。お医者さまは、少し迷っています。アンジェレッタのためにには急がなくてはならないんですが、お母さんをこのままにしておいていいものでしょ。うか…

でも、ラッセンはすぐに動き出していました。アンジェレッタの熱を下げる事が、今は一番大事なんです。

(頑張るんだよ、アンジェレッタ)

解熱によく効く薬草が、すぐこの近くに生えているんです。ラッセンは急いでネズミの穴を抜けると階下に戻り、別の出口から外に飛び出していました。

夏の、鋭い光が小人を激しく突き刺してきます。ラッセンは石畳の両側にある背の高い青草を選びながら、精いっぱい走り続けました。灰色の石垣の下の、川を見下ろす崖に薬草はあるんです。ほら、もう、すぐそこに…

ラッセンの姿が、濃い緑色をした茂みの向こうに消えています。その後ろ姿を、家の影から大きく丸い二つの瞳がじっと追いかけて

いました……

ようやく、お医者さまは馬車に乗り込むとしています。お母さんは玄関まで見送りにきていたんですが、すぐに苦しんでいたアンジェレッタの所へと戻ってしまいました。

「あら?」

アンジェレッタの部屋の床板に、小さな赤い点が幾つか見えるんです。まるで、血のようです。思わず身震いしたお母さんは、急いでアンジェレッタのベッドに田を向きました。

「……?」

ベッドの上に散らばっているは何でしょつか?

近付いてみると、それは何本かの草花でした。紅紫色をした丸い可愛らしい花が、細い茎の先端で咲いています。お母さんは、その花が何であるのかよく知っていました。

慌てて、窓を開けます。お医者さまは、今にも走り出そうと御者台で鞭を手にしているんです。

「先生! シニアスの花があるんです!」

その言葉に、お医者さまは大急ぎで馬車から飛び降りました。シニアスの花なら、解熱剤の役割を充分に果たしてくれるはずです!

お医者さまが薬草を調合している間にも、床の上の鮮やかな点は部屋へと入り込む熱気に乾いてしまいます。どうしてシニアスの花が床に落ちていたのかなど、もう誰も知りませんでした……

アンジェレッタは、次の日の夕方まで眠り続けました。もう、熱も下がっています。田を覚ました後で、夕食もほんの少しですが食べる事が出来ました。

その時、初めてアンジェレッタは床に散らばっていた花と、赤い血のような点についてお母さんから教えてもらつたんです。

「血…」

アンジエレッタには、すぐに誰が花を採つててくれたのか分からりました。勿論、ラッセンです。でも、床に血が付いているなんて……

恐いんです。とても恐いんです。ラッセンは大丈夫なんでしょうか…ひどい怪我をしているなら、それは自分のせいなんです……夕食なんて、もう食べる事が出来ません。げつそりとやせてしまつた顔をいつそう曰くさせながら、アンジエレッタはただラッセンの事だけを考えて震え出していました。

「あら、寒いの？ 今日は、もう寝なさい」

そう言つて、お母さんは夕食を片付けて部屋を出でて行きます。寒い？ いいえ、寒くなんてないんです。ただ、アンジエレッタはとても恐かつたんです。とつても、とつても恐がつていたんです。…アンジエレッタは、ラッセンのお姉さまがネコに命を奪われた事を思い出していました……

もしも、自分のためにラッセンがそんな事になつてしまつたら…アンジエレッタは、もう自分を許せないでしょ……

怯えた田は、ゆつくりと床の上を滑ります。確かに、小さく乾いた赤い点が本棚の隙間からベッドの下まで続いているんです。どんなに違つていてほしいと願つても…でもやつぱり、それは血なんです……

「ラッセン…！」

しなやかな指先をからめると、きゅっと強く胸に押し当てて、アンジエレッタは不意に泣き出してしまいました。

「ラッセン…ラッセン…」

苦しいんです…震えが止まりません…アンジエレッタの胸の奥で、何かが壊れそうなんです……

アンジエレッタは、力いっぱい、両手を胸元に押し付けながら、古いネズミの穴まで歩いてこいつと足を下ろしました。

「あつ…！」

でも、衰弱しきつている足は、アンジエレッタの体を支えてはくれませんでした。何度もやってみても、ベッドから離れる事すら出来なくなつているんです。

「どうしようもなくて……」アンジエレッタは両手で顔を覆うと、これ以上無いくらい悲しい声で泣き続けました。

「……アンジエレッタ……泣かないで……」

突然、微かな、本当に微かな声が足下から聞こえてきました。アンジエレッタは驚いて顔を上げると、濡れた瞳で急いでベッドの下を覗き込みました。

「ラッセン！」

小人の少年は、血と埃でひどく汚れたまま、必死になつて床の上まで出ようとしました。でも、すぐに力尽きて倒れてしまいます。アンジエレッタは悲鳴を上げると、すぐにラッセンを台の上まで運び上げました。

「ラッセン……ラッセン……」

涙が止まりません。ぼろぼろの服を着て、ずっとこんなひどい状態でラッセンはベッドの下に隠れていたんですね。それも、自分のようない人間のために……

白く美しい滴で、やつれた頬を濡らし続ける優しい少女に、ラッセンは全身の力を込めて笑つてみせました。

「ほら……大丈夫だからね。泣かなくてもいいんだよ……ちょっと、ネットやりあつただけなんだから……」

「ラッセン……」

もしかしたら……そう、もしかしたら、死んでいたかも知れないんですね……

アンジエレッタは、いつまでも、いつまでも泣いていました。もう、ラッセンも何も言こません。少年は、そんな彼女を黙つて見つめるだけでした……

「あはは、くすぐったいよ。アンジエレッタ」

「動かないで、ラッセン」

ちょっと怒つてみせると、アンジエレッタは包帯を綺麗に結んでしまいました。

ラッセンがベッドの脇の引き出しに入つて、もう二日になります。でも、アンジエレッタの心からの看護のおかげで、しばりすれば元気になることでしょう。

白い包帯でぐるぐる巻きにされたラッセンを見て、アンジエレッタは急に涙が溢れてくるのを感じていました。どうしてでしょうか。今は、とっても嬉しいはずなのですが……

アンジエレッタはラッセンにやつと顔を近付けると、優しく囁いていました。

「もう……あんな危険な事はしないでね……」

突然の言葉に驚きましたが、ラッセンはすぐこじりと笑つて彼女を見上げました。

「つづん。大好きなアンジエレッタのためだからね。もつと危険な事でもすると思つよ」

「ラッセン……」

ちょっと恐くて……でも、その言葉はとても嬉しいんです。アンジエレッタは、不意にラッセンを持ち上げていました。

「ありがとう……ラッセン、『本当』にありがと……」

柔らかく包み込んだラッセンを、アンジエレッタは白い頬に押し当てる。ラッセンは自分の手のひらくらいにある涙をよけながら、その滑らかな頬を軽く小突くと言いました。

「ほら、泣いたりしないで。今度は、どんな話を聞きたい? 三羽のメジロの話なんて、どうかな」

その言葉にくすくすと笑い出しながら、アンジエレッタはとても素晴らしい、綺麗な笑顔をラッセンに向けました。

「ええ、そのお話を聞かせて……」

もう一度、そっと頬に押し当てる。アンジエレッタはラッセンを台の上に戻しました。

やがて、すぐに楽しそうな笑い声が部屋の窓から外に流れ出します。きっと、もうオルゴールの音色も聞こえなくなり、ただ明るい歌声だけが、この窓からいつも温かな風に運ばれていくことでしょう。

『交差』 おわり

### 3・神の住む家

ゆつたりとした豎琴の音色が、朝の柔らかな時間に乗つてアンジエレッタを包み込んでくれます。アンジエレッタは、田を閉じてその豊かな曲に身を任せながら、見た事も無い風景を心の内に描き出していました。

北を巡る太陽の下、若葉のように澄んだ緑色をした平原が見えてきます。そこを流れる風は、優しく、そつと触れてはきらきらと輝いて通り過ぎていくんです。ずっと遠くには、雪で白く装った山々が青く靈んでアンジエレッタを見つめています。

とても気分がいいんです。ですから、静かに、吸い込まれるように豎琴の音が消えていくと、アンジエレッタはちょっと残念そうな顔をしてしまいました。でも、すぐに感謝に満ちた美しい笑顔で、アンジエレッタは木陰に座つたフレッシュさんにお礼を言いました。「いつも、素敵なお色をありがとうございます、フレッシュさん」「いいんだよ。俺こそ、みんなの天使に毎朝曲を聞いてもらえるなんて、そんなすげえ特権を『えてもらつたんだからね』

「そんな…」

思わず、アンジエレッタは嬉しくて頬を上気せてしましました。綺麗な細い髪をしてこるフレッシュさんは、そんなアンジエレッタに片手をつむつてみせると、外階段を上つて一階に戻つてしましました。

「キジバトさんも帰るんだね」

フレッシュさんの足下で虫をつけばんでいたキジバトさんも、青空高く飛び去つてしまつたんです。窓辺で隠れていたラッセンは、不思議そうな顔でその後姿を見送つていました。

「ええ、いつもそつなの。まるで、フレッシュさんの豎琴だけを、聞きたに来るみたい」

そう言って、アンジエレッタはラッセンを優しく畠まで運びまし

た。自分も、ベッドに腰掛けます。この前の発作から、アンジエレッタは以前ほど長く歩いたり立つたりする事が出来なくなっていました。でも、アンジエレッタはそんな事を誰にも知られないように頑張っていましたから、気付いているのはラッセンだけだったんですね。

「フレッドさんの奏でる音色は素敵だからね。でも、どうしてもっと大きな町に出ないのかな？」

フレッドさんの腕前なら、スイールよりももつと大きな町でも十分に認められるはずです。不思議そうに首をかしげるラッセンに、アンジエレッタは悲しそうな色をその青い瞳に映していました。

「…待つていてるんだと思うの。ラーシャさんの事を、ずっと……」

「え？」

その辛そうな仕草に、ラッセンは真剣な顔でアンジエレッタを見上げました。

「…話してくれる？ アンジエレッタ」

アンジエレッタは小さく頷くと、淡い黄色の肩掛けをはずし、膝の上で握り締めました。その清らかな瞳も、じつとその指先から動きません…

「…三年くらい前まで…フレッドさんね、ラーシャさんて言う名前の女性と一緒に暮らしていたの…わたし、今でも覚えてる。フレッドさんよりも、もっと綺麗な金色の髪をしていて…どんな人にも優しくて、とつても思いやりのある人だったのよ…

その日ね…ラーシャさん、木の実を探りに森へ入つていったそうなの。一週間に一度、必ずそうしてきましたから…みんな、何がが起こるなんて思つてもいなくて…」

「アンジエレッタ…」

雪のように白い頬に、涙が伝い落ちるのを見て、ラッセンは立ち上がつて台の端まで駆け寄りました。でも、それ以上は行けないんです。どうしようもなく…言葉でしか、慰めてあげられなくて…

「…ラーシャさん、森に入つたまま…とうとう、戻らなかつたの…」

みんな、必死になつて探したのに…わたし、何も出来なくて…た  
だ、ここでずっとお祈りする事しか出来なくて…

…あんなに、ラーシャさんに優しくしてもらつたのに…何も出来  
なかつたのに…フレッドさん、いつもわたしの事を気にしてくれる  
の…」

「でも、アンジョレッタは、アンジョレッタに出来る事を一生懸命  
したんだよ。きっと、それは本当に一生懸命だったと思うし…フレ  
ッドさんだつて、それが分かつてからアンジョレッタを大事に思  
つてくれてるんだよ。だから、そんなに自分を責めないで。そんな  
事をしたら、フレッドさんに失礼だと思ひよ」

「ラッセン…」

濡れた視線の先では、ラッセンが心配そうに見上げています。アン  
ジョレッタはそつと手を拭うと、恥ずかしそうにそんなラッセン  
に微笑んでいました。

「そうね…ありがと、ラッセン」

「ううん…僕なんて、アンジョレッタに何もしてあげられなくて…  
せつからく、話してくれたのに…」めん…」

すつかりしょげているラッセンを見て、アンジョレッタは驚いて  
首を左右に振りました。決して、そんな事はないんです。

「そんな事、言わないで…ラッセンがいてくれるから、いっしょに一  
緒にお話をしてくれるから…わたし…」

そう…樂しく笑つて生きていられるんです…

しばらく、声が続きません。でも、音の無い『言葉』は、アンジ  
ョレッタの心の中から黄金色の川となり、確かにラッセンへと流れ  
ていきました。

「だから…」

ようやく、声に出来たのはそれだけでした。でも、その一言でラ  
ッセンは温かな笑顔を取り戻し、アンジョレッタに言つてくれまし  
た。

「ありがとう、アンジョレッタ。じゃあ、アンジョレッタも…ね?」

アンジエレッタは、ちょっと驚いた顔をしていました。でも、すぐに真っ赤に頬を染めると、はにかみながら素敵な微笑を浮かべて頷きました。

「ええ… もう、自分を責めたりしないわ… ありがと、ラッセン…」何度も、何度も「ありがと」って言つてる気がします。でも、アンジエレッタにはそれ以上の言葉が思い付かないんです。その事が、とてもじれったいんです…

でも、田の前で、ラッセンはこんな気持ちも分かつてこるかのように笑つてくれます。そして、それはきっと…《本物》に分かってくれているんです。

アンジエレッタにとつて、それはとても嬉しい《真実》でした…

翌日も、フレッドさんは素晴らしい豊饒の音色をアンジエレッタに披露してくれました。

…でも、少しだけ、おかしいんです。音の波が、微妙に揺れいる気がします。

アンジエレッタがじつと見ていると、フレッドさんは時々ロートウ川のある方向に目を向けています。その先には、ラーシャさんの入つていった森があるんですね…  
(まさか、フレッドさん…)

今までにも、何度もその仕草を見かけた事はあります。でも、音楽が変化するほど、フレッドさんの心に深く、その思いが取り付いた事は無かつたんです。

アンジエレッタは、心配と不安で口を開きかけました。でも、すぐ止めてしまします。今はまだ、フレッドさん自身も自分の願いに気付いていないかも知れません。もしも、アンジエレッタの一言で決意してしまつたら…

どうすればいいんでしょう…どうすれば、フレッドさんを森に行かせずに済むのでしょうか…

……結局、アンジエレッタは何も言えずに、家に入るフレッドさ

んを見送っていました。

ラッセンは、そんなアンジェレッタの想いにすぐに気付きました。でも、別にもつと気になる事があつたんです。

今日も、また、あのキジバトさんが来ていたんです。「フーシャさんのいなくなつた森は、以前、ラッセンが住んでいた森の事です。あのキジバトさんなら、何かを知つているのかも知れません。だから、フレッドさんの豎琴を聞きに来ているのかも知れないんです…」すぐに、ラッセンはアンジェレッタに床に下ろしてもらつと、急いで走り出しました。アンジェレッタの驚いた声がしましたが、ラッセンは一度だけ安心させるように振り返つて笑顔を見せた後、本棚の隙間に駆け込んでしまいます。

アンジェレッタの家を飛び出した時、キジバトさんは今にも舞い上がるうとしているところでした。

「待つて、キジバトさん…」

「どうしたの？ ラッセン」

大きく息を切らしている小人の姿に、キジバトさんは再び羽を閉じる首をかしげました。

「うん…ちょっと、聞きたい事があつたんだ」

近くの茂みに身を潜めると、ラッセンはネコや人間に聞こえないように、小さな声で言いました。

「ねえ、キジバトさん…いつも、フレッドさんの豎琴を聞きに来るよね？」

「ええ、とても素晴らしい音色ですもの。ビニカ、懐かしい氣もするし…」

「懐かしい？」

「そうなの。過去の事なんて、すぐに忘れてしまう私が言つ言葉ではないかも知れなけど…懐かしいのよ」

そう言つと、キジバトさんは静かに、小さく啼きました。何だか、その啼き方が悲しそうで…ラッセンは、少し黙り込んでしまいました。

た。

「…ねえ、キジバトさん…」

しばらくしてから、遠慮するよりラッセンは小さく尋ねていました。

「森の中で、ラーシャさんつて言ひ名前の女性に会つた事はない？あのフレッドさんと一緒に暮らしていた人なんだけど…」

でも、キジバトさんが答える前に、ラッセンはふと思い付いたよう付け加えていました。

「もしかすると、キジバトさんがラーシャさんだつたのかも知れないね…」

キジバトさんは、少しの間、黙つて考えているようでした。ラッセンは思わず知つているのかと期待しましたが、残念な事に次にはキジバトさんは小さく首を振つていました。

「聞いた事は無いわ。それに、私が人間だつたとも思えないし…過去なんて、覚えていないもの。でもね…私は、あの人の豊琴が『好き』なの…だから、もしかすると、そつだつたのかも知れないわね…」

最後は囁くようにそつ言つと、キジバトさんは翼を広げて空に舞い上がつてしまいます。

「じゃあね、ラッセン」

「ありがとう！」

ラッセンの言葉に、キジバトさんは一度大きく旋回すると、東のロートウ川、そしてその更に向こうにある森へと帰つていきました。

アンジエレッタは、その夜、少しの間目を覚まし続けていました。ラッセンの話では、あのキジバトさんですら、ラーシャさんの事は知らなかつたんです。もう、絶対に森にはいないのでしょう…だったら、なおさらフレッドさんを森には行かせたくありません。あんなに、森に行つてラーシャさんを探したがつているフレッドさんを見るのは初めてだつたんです。どうすれば、アンジエレッタ

にそれを止めさせる事が出来るのでしょうか…

青い月の光が、窓を通して床に美しい銀の泉を創り出しています。流れ行く薄雲によつて時々揺れながらも、輝き続いているその鏡を見つめながら、ふとアンジョレッタは別の思いにとらわれていました。

…本当に、森には行かせない方がいいのでしょうか…

フレッドさんは、ラーシャさんの事が本当に好きだつたんです。例え、森の中で死ぬ事になつても…ラーシャさんを探し続けて倒れる方が、フレッドさんは幸せなのかも知れないと。

アンジョレッタは、自分の考えにびっくりして、少しだけ迷つてしまいました。……でも…でも、やつぱりフレッドさんは死んでもらいたくないんです。ラーシャさんだって、自分のためにフレッドさんが死んでしまつたら…きっと、とても悲しむと思うんです。

…いえ…自分を恨むかも知れません…

アンジョレッタは、その時、シニアスの花を探りに行って傷付いたラッセンの姿を思い出していました。思わず、恐くなつて身震いしてしまいます。ええ、きっとそういうです…絶対に、ラーシャさんはフレッドさんに傷付いてもらいたくないはずです…

アンジョレッタはベッドの上で半身を起こすと、そつと青い瞳を閉じました。白くて細い指先を、幼い胸元で組み合わせます。窓から斜めに射し込んでくる銀色のカーテンを前に、アンジョレッタは静かに祈り始めました。

「神さま、お願いします。どうか、フレッドさんを森に連れて行かないで下さい。フレッドさんは、とても寂しいんだと思います。でも、森に入つて傷付いて…もしも死んでしまつたら…ラーシャさんは…

そうです…ラーシャさんは、きっと…

駄目です。涙が溢れてくるんです…でも、アンジョレッタは、きゅつと胸に両手を押し付けると、それでも小さく呟いていました。

「…きっと、生きていたくないと思います…」

アンジエレッタは、いつしかずつとラッセンの事ばかり考えていきました。ラッセンがもしも自分のために死んでしまつたら…アンジエレッタは、生きていきたいのでしょうか…

「お願いします、神さま…フレッドさんを、助けて下さい…」  
アンジエレッタは、自分の事のように真剣に祈り続けていました。涙がずっと頬を伝い落ちていても、それを拭いもせずにひたすら祈り続けます。アンジエレッタに出来る事は、それだけなのです…でも、それは《全て》をする事と同じくらい、苦しくて辛いものでした。

(アンジエレッタ…)

ラッセンは部屋に入ろうとして、たまたまアンジエレッタの言葉を聞いてしまいました。悲しそうに、心からフレッドさんの事を思つて祈つているんです。

ラッセンには、神さまがどんな人なのか分かりません。でも、アンジエレッタは、神さまは教会にいらっしゃるんだと言つています。残念ながら、アンジエレッタには教会に行く事すら出来ないです。どれだけ、行きたいと望んでも無理なんです…

…でも、ラッセンはどうでしょう。今までに、お祈りした事が無くとも、少なくとも、教会に行く事は出来るんです。神さまと言つ人に、アンジエレッタが動けず、ただ部屋の中で祈り続けている事を教えてあげる事は出来るんです。

月明かりが、アンジエレッタの頬に伝う星を煌かせています。小さな咳きが続く中、星の流れも途切れる事無く溢れ出していくんです。

ラッセンは黙つて頷くと、すぐに階下へ向かつて駆け下りました。  
(アンジエレッタ、僕が君の代わりに行つてあげるよ…)

涼しくなってきた夜の空気が、家を飛び出したラッセンを包み込みます。ラッセンはそのまま石畳の道を右に曲がると、小人にとってはとても辛い坂道を上り始めました。

何の物音もしません。でも、こんな時が一番危険なんです。ラッセンは、慎重に身を草や石に隠しながら、足早にクリーム色をした町並みの間を通り抜けていきました。

青い月が、可愛い星達の光を抱き込みながら、空を滑っています。その銀色の光の腕は、ラッセンの小さな姿をとらえ、ずっと守るよう追いかけていました。

…どれだけの時間が過ぎたのでしょうか。

人間であればすぐなのですが、ラッセンにとつてはそろそろ限界が近付いていました。森から出てきた時はもつと長い距離を歩いていたんですが、今のラッセンは、必ず明日の朝までに戻らなくてはならないんです。もしも戻らなければ、アンジエレッタがどれだけ心配する事でしょう。ですから、ラッセンは周りに気を配りながらも、必死になつて急いでいたんです。

ロートウ川からそそり立つ崖の上に、ようやく、たどりついたようです。草の無い石畳の広場の端に立つと、足下にある茶色い屋根の向こうに星が見えています。その広場の先に、とても大きな建物が立つていました。

ラッセンには、昼間であつても、この建物の屋根を見る事は出来ないでしょ。ましてや、今は夜です。建物は真っ暗な闇の中にとけ込んでいて、何処までも広がっているような気がします。いいえ、今から入るうとしているこの教会は、夜の闇そのものかも知れません…

少しだけ、ラッセンは体を震わせました。恐いんです。神さまと言つ人は、どうしてこんな家に住んでるんでしょう。

でも、その時、ラッセンは部屋の中で真剣に祈つてゐるアンジエレッタを思い出していました。…そうです。どうしても、入らなくてはいけないんです。アンジエレッタのためなのですから…

ラッセンは大きく息を吸い込むと、その建物に近付いていきました。勿論、人間のための扉を開ける事なんて出来ません。でも、その木の扉の方は、すつかり傷んでぼろぼろになっています。な

んとか、入り込めるかも知れません。

「いいえ。入り込むんです。ラッセンは一番柔らかそうな部分を選んで、無理に頭を押し込んでしまいました。幸い、隙間には、まだ余裕があります。そこで、一気にラッセンは教会の中へと滑り込んでしまいました。

困った事に、真っ暗で何も見えません。光と言えば、奥の方で何かが揺れているだけなんです。その光は、よく分からぬ白くて大きなものを照らしているようでした。

ラッセンは、木の床の上をゆっくりと歩いて行きました。どこで、神さまはいるんでしょう？

「うわっ！」

何かにぶつかりかけて、思わず声を上げてしまいます。ラッセンは、びくっとしてしばらく立ち止まつっていました。さつきの声で、神さまが近付いてくるかも知れないんです。勿論、アンジェレッタがお願いするほどの人ですから、神さまはいい人なんでしょうが……でも、やっぱり、どきどきしてしまいます。

でも……何も出できません。

ラッセンは、もう一度、歩き始めました。

近付いてみると、見えていた光がもうそくの炎だった事が分かります。赤い炎は、白くて大きな人と、その後ろにある、よくは分からぬさまざま色のものを照らしています。ラッセンはその光が届く所まで来ると、近くにあつた椅子の足に隠れて白い人を見上げていました。

両手を広げて、木にぶら下がっています。頭は、力無く垂れています。ラッセンにも、今はこれが彫刻なんだと分かっています。でも、揺れる炎で生まれた影は、その彫刻に何か不思議なものを与えているような気がします。今にも、何かを話しかけてきそうなんです。

この彫刻が、神さまなんでしょうか。

：彫刻に、いつたい何が出来ると言うのでしょうか。

でも、アンジエレッタはあんなに一生懸命祈っていました。それに、これは神さまではないのかも知れません。ラッセンには探し出せなかつただけで、もつと他の所に隠れているのかも知れないんです。

朝までに帰るつもりなら、もつと他を探している時間はありません。そこで、ラッセンはこの白い彫刻の方を向いて……でも、心は他の所にいるかも知れない神さまに向かって手を組みました。

「神さま……アンジエレッタのお願いを聞いてあげて下さい。アンジエレッタは、部屋から一歩も出る事が出来ないのに、あなたに真剣にお願いをしています……」

どうか、アンジエレッタの部屋まで来てあげて下さい。そうすれば、どんなに一生懸命フレッドさんのためにお願いをしているか、よく分かると思います。

……アンジエレッタは、フレッドさんに森に入つてもらいたくないんです。だから、お願いしているんです。悲しんでいるんです……アンジエレッタは、とても優しい子です。いつも、他の人の事ばかり考えています。

でも……アンジエレッタが、あんなにも悲しんだらいけないんです。

……僕も、辛いんです……

だから、僕のお願いです。神さま、アンジエレッタのために、お願いを聞いてあげて下さい。フレッドさんを、森に連れて行かないで下さい……」

真剣に、静かに、ラッセンは話し続けました。アンジエレッタの代わりにお願いするなんて、出来るとも思っていません。だから、ラッセンは何度も何度も、神さまに祈り続けたんです。

アンジエレッタのお願いを、聞いてあげて下さい、と……

いつまでも、いつまでも……

ラッセンは、アンジエレッタに心配させないようこ、気付かれないようにしたつもりでした。でも、不思議なことに、アンジエレッタ

タには分かつてしまつたんです。

「ラッセン、どうしたの？ とても、疲れているみたい……」

「え？ あつ、その……」

ラッセンには、嘘はつけません。どうしても、顔に出てしまつるです。

「ア、アンジョレッタだつて、ほとんど眠つてないみたいだけ……」  
慌ててそう言つましたが、アンジョレッタは心配そつない顔をしてラッセンを両手で包み込んでしまいました。

「ラッセン……まさか、その事で……」

台の上まで運んだ後、アンジョレッタは黙つてラッセンを見つめ続けていました。青く澄んだ瞳が、じつと動かないんです。その心配と不安に彩られた視線に、ラッセンはとうとう話してしまいました。

「うん……アンジョレッタのお願いを聞いてもらいたくて……その、教会まで行つてきたんだよ……」

「ラッセン……！」

夜中に、あんな所まで出掛けたなんて……

「どうして、そんな事を……」

「アンジョレッタのためだからね」

きつぱりと、真面目な顔でラッセンは言い切りました。その言葉は嬉しいんです。嬉しいんですけど……

「でも……もしも、ネコに襲われたら……」

ラッセンは、また自分のために傷付いていたかも知れないんです……

「……ラッセンが傷付いたら、わたし……お願い、もう、そんな危険な事はしないで……」

涙が溢れます。ラッセンは、こんな自分の想いを本当に分かってくれているんでしょ？ こんなに辛い想いを……

「アンジョレッタ……」

少し怒つているようなアンジョレッタの口調に、一瞬、驚いてしまいます。でも、すぐにラッセンは静かに言いました。

「……アンジエレッタ……アンジエレッタが苦しんでいると、僕だって苦しいんだよ……だから、やつぱり……アンジエレッタのためなら、僕は何でもするよ……」

「ラッセン……」

アンジエレッタは、もう何も言えませんでした。アンジエレッタだって、ラッセンが悲しい時は、自分も悲しいんです。まさか、ラッセンもそんな風に想っていたなんて……

「ありがとう……ありがとう……」

やつぱり、ラッセンは自分の想いを《全て》知つていてくれるんです……

「アンジエレッタ。心配かけて、ごめんね。でも、無理な事はしないよ。そんな事をすれば、きっと……」

ラッセンは、少し赤くなりながら口を閉じてしまいます。アンジエレッタも、淡く頬を染めながら、途切れた言葉に付け加えていました。

「ええ……わたし、ラッセンがいてくれるから笑えるんだもの……ラッセンがいてくれるから、毎日を楽しく過ごせるのよ……だから、ラッセンがいなくなつたら……わたし、生きていたくなんかない……」小さく呟きます。きっと、アンジエレッタの心はこの通りなんです。ラッセンには分かってるんです。でも……アンジエレッタが死んだりしたら、ラッセンは……

……いいえ、ラッセンはその言葉を飲み込んでしまいました。ラッセンも、アンジエレッタも、お互いにそう思つていてるんです。そして、それほども想つていてるからこそ、相手のためには危険な事もするんです。お互いに……

それは、もう言わなくてもいい事なんです……ええ、きっとそういうんです……

秋が近付く穏やかな日差しの中、二人は黙つたまま、そつと微笑みを交わしていました……

「どうぞ、家に寄つていつて下さい」

「ですが…」

その日の夕方、タックさんの声がアンジエレッタの部屋の中に飛び込んできました。でも、応える女性の声は聞いた事が無いんです。お客様でしょうか。

アンジエレッタは窓辺に近付くと、ラッセンをそこに優しく下ろして外を覗いてみました。

（あつ…！）

思わず叫びそうになつたのを、必死で抑えます。アンジエレッタのそんな様子に驚いて、ラッセンも用心しながら外を見てみました。向かいの家の前で、タックさんが見た事も無い若い女性とお話ししています。見事な金髪を背に流した、とても綺麗な人なんです。

「あんた。家の前で、何を話してるんだい？」

不思議そうに扉を開けた瞬間…ラッセンが驚いたことに、チャエルナさんはその人を見て悲鳴を上げていました。

「ラーシャじゃないか！」

（え？）

ラッセンは驚いてアンジエレッタを見上げました。その尋ねるような視線に、アンジエレッタも微かに頷いています。

ええ、そうなんです。フレッドさんと一緒に住んでいた、あのワーシャさんにそつくりなんです！

「いや、違うんだよ。この人はメリ亞さんと言ひて、森の向いのキヤスリアの町から歩いて來たんだ」

「初めてまして…」

「…あつ、ああ、そうなのかい。ごめんよ、あんまり知り合いに似てたもんだから」

「いえ、構いません。気にしないで下さい…」

メリ亞さんは、しとやかに微笑んでいます。それを見ていたアンジエレッタは、少し声をつまらせながら呟いていました。

「不思議ね…ラーシャさんも、あんな風に笑いかけてくれたの…」

「アンジエレッタ…」

見上げるラッセンに、アンジエレッタは素晴らしい笑顔を向けて言いました。

「嬉しいの…あつと、神さまがラッセンのお願いを聞いて下さったのよ…」

「ううん。アンジエレッタが、あんなに一生懸命、お祈りしたからだよ」

互いに笑みを交わしている下では、チエルナさんが話しが続けています。

「やうかい、旅の途中で泊まる所が無いんだね？ だつたら、やあれ、中に入つて…」

「いや、それが…」

「冬の間、この村に留まりたいんです。ですから、タックさんに無理をお願いして…」

困つてしまつたタックさんに代わつて、メリアさんがそこまで言った時、教会の方の坂道から聞き慣れた足音が響いてきました。

「フレッドさんよ」

アンジエレッタには、よく分かります。ええ、この辺りの人達のことなら、アンジエレッタは誰よりも知つてゐるんです。

豎琴を手に、少し重い足取りでフレッドさんは曲がり角から姿を現しました。その田が、メリアさんに止まつた時…

高い音を立てて、大切な豎琴は石畳の道に落ちて転がつてしまつました。

「フレッド。こちらはメリアさん。キアスリアの町から来られたんだよ」

急いで、タックさんが話しています。アンジエレッタもどきどきして見ていましたが、しばらく動かなかつたフレッドさんは、やがて豎琴を拾つて何も言わずに再び歩き出していました。

豎琴を手にした腕の震えが、ラッセンにも分かります。必死になつて、フレッドさんは自分の気持ちを抑えようとしているんです。

そんなフレッドさんに、メリ亞さんは素敵な笑顔で話しかけていました。

「初めまして、フレッドさん。豎琴をお弾きになるんですね」

「ええ… よかつたら、また今度、聞きに来て下さい」

「ありがとうございます」

それだけで、フレッドさんはメリ亞さんの顔を見ないまま、足早に家に戻ってしまいました。

「さあ、あんた。それじゃあ、この先の空き家に案内してあげなよ」

「あ？ ああ、俺もそう思つてたんだよ」

タックさんは慌ててそう言つと、チエルナさんに追い払われるようにして、メリアさんと一緒に坂の上へと歩き出しました。

二人の姿が、曲がり角の向こうへと消えてしまいます。見送つていたアンジェレッタがその視線を戻してみると、チエルナさんが笑いながら片手をつむつてくれました。

「チエルナさん…」

アンジェレッタも、これ以上無いくらい嬉しそうな微笑みで応えます。

「さあ、一人分、夕御飯を多く作らなくちゃならないね」

そう言つと、チエルナさんは豪快に笑いながら、家の中へと入つてしましました。

夕暮れが、狭いこの道の中まで茜色に染めています。淡くて透明な桃色に縁取られた雲を見上げながら、アンジェレッタは胸の中で神さまに… そして、ラッセンに何度も何度もお礼を言つていました…

翌日から、フレッドさんの音色は元の通り落ち着いてきました。

でも、一つだけ変わった事があります。あのキジバトさんが来なくなってしまったんです。

更にしばらくすると、朝の観客にはアンジェレッタとラッセンの他に、もう一人、メリ亞さんが加わりました。あの、キジバトさんの代わりになるかのように、木陰でフレッシュさんの横に座っているんです。

キジバトさんが、本当にあのメリ亞さんに変わったのか…ラッセンには分かりませんでした。

『神の住む家』 おわり

今日は、朝から雨が降り続いている。赤や黄に塗り分けられた森も、これではすぐに、たくさんの葉を散らせてしまうことでしょう。

大好きな青空も見られず、少し疲れている気がします。そんなアンジェレッタが白い寝間着を着てベッドに横たわっていると、ラッセンが床から話しかけてくれました。

「僕、もう帰るよ。ゆっくり寝たほうがいいよ、アンジェレッタ」

「ええ…ありがと、ラッセン」

いつも、ラッセンは心配して気遣ってくれます。

何だか弱々しい微笑みに見送られながら、ラッセンは本棚の隙間へと戻つてしましました。

それから、すぐの事です。

久し振りにエルサ姉さんの髪飾りを取り出して見ていたラッセンは、不意に襲つてきた激しい震動に驚いて立ち上がりました。

（どうしたんだろう？）

あれは、玄関が勢いよく閉められた音です。

……嫌な予感がします。胸の奥が苦しいんです。

「アンジェレッタ…！」

急いで扉を抜けると、ラッセンは一階へと向かってしました。

古いネズミの穴を抜けると、枕元の灯りが見えてきます。本棚の影に隠れながら覗いてみると、アンジェレッタが苦しそうな声を上げているんです。その横で、お母さんが真っ青な顔をして座つていました。

きゅっと握り締めたアンジェレッタの愛らしい手を、必死になつてお母さんも握っています。その時、息も出来ずについたラッセンの耳へと、お母さんの弦きが聞こえてきました。

「アンジエレッタ…頑張つて、お願ひ…フィオラのよつて、私達の所から去つたりしないで…」

その言葉にはつと我にかえると、ラッセンは外に出よつてしまつた。発作なら、あのシーアスの花が、もう一度役に立つてくれるはずです。

でも、その時、玄関に馬車が到着しました。偶然にも帰る途中だったお医者さまを、お父さんが見付けて呼び止めたんです。一人が走り込んでくる音を耳にすると、再びラッセンは部屋の中へと戻りました。

すぐに、お医者さまはアンジエレッタを診察してくれます。薬を調合して、注射もしてくれます。

おかげで、しばらくすると、アンジエレッタの呼吸も随分と楽になつてきました。

「発作の間隔が短くなつています。もう、ベッドから動かしてはいけませんよ。きちんと守つていただきなくしては、私もこれ以上はお約束出来ません」

「そんな……」

お母さんは、顔を両手で覆つと泣き出していました。本棚の影にいたラッセンも、とても大きな悲しみに泣きやうな顔をしています。もう、アンジエレッタは朝の挨拶さえ出来なくなるんです。フレッドさんの音楽も聞く事が出来ません。それは、アンジエレッタについて、どれだけ辛い事でしょう…

「…いつも、覚悟はしています…全ては御心のままなのですから…」  
お父さんはお母さんを支えながら、静かにお医者さまにやう言いました。

黙つて、お医者さまも頷き返しています…

…みんな、もうそれ以上は何も言いませんでした…

雨の音だけが、窓の向こうから染み込んできます。でも、何処か静かなんです。深くて重い沈黙が横たわる中、ラッセンの心は鋭い痛みにずっと締め付けられていました…

翌朝には、雨は止んでいました。でも、青空の欠けひびきを見付けられません。まだ、灰色の雨雲が、空一面を覆いつくしていました。秋の弱まつた日差しでは、とてもその分厚い毛布を剥ぐことは出来そうにありませんでした。

もづ、アンジエレッタは目を覚ましています。上半身を起こす元気も無いのですが、それでもラッセンが声をかけると嬉しそうに応えてくれました。

「気分はどう？ アンジエレッタ」

「ありがとう……じめんなさい、心配をかけてしまって……」

「いいんだよ。そんな事、気にしないで」

落ち着いた声です。残念ながら床の上からでは顔は見えませんが、もう大丈夫なのでしょう……

でも、油断は禁物です。いつ、また発作が起ころるかも知れないんです。

「今日は、もう帰るよ。無理をしたらいけないからね……」

「待つて、ラッセン……」

帰ろうとしたラッセンの背中を、アンジエレッタの真剣な声が引き留めました。

「どうしたの？」

「お願い……聞いて欲しいの……」

ラッセン……わたし、もう少ししたら……神さまのところに行くかも知れないわ……

「アンジエレッタ！」

驚いて叫ぶラッセンに、アンジエレッタは静かに続けています。

「つづん……分かるの。もうすぐ、フィオラお兄さまのところに行くんだ、つて……でもね、ラッセン……わたし、悲しくなんてないの……生まれてすぐに神さまに召されて、会ったことも無いけれど……お兄さまの住んでいらっしゃるところに行けるんだもの……」

「アンジエレッタ……」

「嬉しいの…だから、ラッセン…」

…その時がきたら、笑つて欲しいの…喜んで欲しいの…ラッセンの、いつもの元気な笑顔で…」

「出来ないよ！　出来るはずないじゃないか！」

床の上から、震える事が聞こえます。アンジエレッタは流している涙を覺られないように、小さな声で呟きました。

「お願い、ラッセン…わたしのために、笑つていてね…」

「アンジエレッタ…」

ラッセンは、黒い瞳から溢れてくる涙を拭おうともしませんでした。エルサ姉さんがいなくなつて、今度はアンジエレッタまでもがいなくなつてしまつたら…いつたい、ラッセンはどうやって生きていけばいいのでしょうか…

…いいえ、アンジエレッタがいなくなつて…生きていきたいでしょうか…

「お願いね…」

そう言つた瞬間、アンジエレッタは少し咳き込んでしまいました。

「大丈夫かい？　アンジエレッタ！」

「え…ええ…」

激しく息を吸い込みながら、アンジエレッタは抑えていたものを吐き出すように、泣きながら言葉を押し出していました。

「本当は、一度でいいから…お兄さまのお墓に行きたかったの…お兄さまのところに行ける事を、お話したかったのに…」

物心ついてからは、アンジエレッタは勿論お墓など行けなかつたんです。でも、最期の望みとなりそうな今、一度だけでも報告をしに行きたかったんです…

「わがままな夢だつて、分かつてゐるの…でも…」

「それ以上、何も言わないで！　すぐに、誰かを呼んでくるから…」

「ううん！　大丈夫…大丈夫だから…」

全身に力を込めて、アンジエレッタは耐えていました。必死になつて、頑張つていたんです。

…少しだけ、落ち着いてきます。

アンジェレッタは、床の上で心配と不安でいっぱいだらうラッセ

ンに、そつと優しく囁いていました。

「ラッセン、本当に、こつもありがとう…こつも、ラッセンが傍にいてくれたから…わたし、楽しく笑つていられたの…

大好き、ラッセン…」

「…僕もだよ、アンジェレッタ…」

静かな、真剣な声が届けられます。その言葉が嬉しくて、アンジェレッタは発作なんて忘れてしくしくと泣き出していました。

「ありがとう…ありがとう…」

小さな咳きだけが、いつまでもアンジェレッタの唇から紡がれていきます…

いつまでも…いつまでも…

しばらくして、アンジェレッタは全てを告げられた事で安心したのか、静かな眠りへと入つていきました。その可愛らしい寝息を確かめると、そつと、ラッセンは本棚の隙間に向かい、部屋を抜け出しました。

自分の部屋に戻ると、ラッセンは椅子に座つてずっとと考え込んでいました。手には、エルサ姉さんの髪飾りが見えています。刻まれている細工を意味も無く眺めながら、やがてその唇からは微かな咳きが零れ出してきました。

「アンジェレッタの代わりには…なれないよね…」

ラッセンにも、分かるんです。もしも…もしも、です…自分  
がアンジェレッタのように死を覚悟したなら…やつぱり、ラッセン  
もエルサ姉さんの所に行きたくなるでしょう。やつと、姉さんの所  
に行けるよ…そう言いたいんです。

でも、アンジェレッタには、それが出来ません。アンジェレッタ  
にとつて、それがどんなに辛い事か…どうして、アンジェレッタだ  
け、あんな思いをしなくてはならないんでしょう…

確かに、ラッセンなら危険とは言え、行く事は出来ます。

でも……

ラッセンが伝えても、お兄さんは喜んでくれるでしょうか。見た事も無く、近くに感じた事も無い人に、アンジェレッタの想いを自分が『全て』伝えられるとは思えないんです。アンジェレッタの願いが真剣であるからこそ、ラッセンは迷っていました。

前に、ラッセンはアンジェレッタの祈りを聞いてもらいたくて、教会まで行った事があります。でも、それはアンジェレッタの祈りそのものを伝えるつもりではなかつたんです。アンジェレッタが祈つてゐる事を、ただ知つてもらいたくて……何度も頼んだんです。アンジェレッタの代わりが出来るなんて、ちつとも思いませんでしたから……

でも、今度は少し違つ氣がします。アンジェレッタの代わりに、アンジェレッタの想いを直接伝えなくてはならないんです。出来るはずがないんです。ラッセンは、アンジェレッタが好きです。大好きです。でも……だからこそ、出来ないんです……

薄暗くなつてゐる部屋の中では、一本のろうそくだけが瞬く光を放つてゐます。その揺れる炎に照らされて、一瞬、ラッセンの手の中の髪飾りが銀色に輝きました。

その時、ふと思つたんです。エルサ姉さんなら、どう受け止めるでしょうか……

ラッセンは、エルサ姉さんの柔らかな笑顔を思い出していました。きっと、エルサ姉さんなら……誰か他の人が行つてラッセンの気持ちを伝えて、真剣に聞いてくれるはずです。そして、伝えてもらつて……例え、その内容が悲しいものであつても……喜んでくれるはずなんです。

ええ……アンジェレッタの想いの『全て』は持つていけません。

ラッセンにとつて、それはあまりにも重すぎるんです。でも、必死になつて話せば、アンジェレッタの気持ちの僅かだけでも伝わるかも知れません。少なくとも、アンジェレッタが伝えたがつてはいたと

…それが出来なくて、ずっと悲しんでいたんだと…それだけはラッセンにも話す事が出来るんです。

ラッセンは決めてしました。今すぐ、崖の上にある公園墓地へ出かけるんです。

椅子から立ち上がると、ラッセンは手にした髪飾りを少しの間見つめました。そして、それをポケットに仕舞い込むと、扉を抜けて家の外へと向かいます。もう、迷いなんて何処にもありません。開かれた扉からは、微かな風が吹き込んできます。それは、誰もいなくなつた部屋を一巡りした後、ろつそくの炎をそつと消し去つてしましました…

東の空には、少し明るさが戻つてきます。このまま雲が薄くなれば、夜には星が見えるかも知れません。

でも、風はとても強く、ラッセンは吹き飛ばされないように用心しながら石や草の陰を歩いていました。おまけに、昨日までの雨で動きにくいんです。すぐに、ラッセンは泥で体中が黒く汚れてしましました。

何度も上がつているんですが、今日ほどこの坂道が辛いと思つた事はありません。でも、アンジェレッタのためなんです。アンジェレッタは、もつとベッドの上で苦しんでいるはずです。

ですから、ラッセンは弱音も吐かず、真剣な顔で石畳の小道を教会に向かつて上り続けていました。エルサ姉さんが、ラッセンの今的样子を見たら、きっと、とても驚いて…でも、心から喜んでくれるでしょう。

ラッセンの顔は、もうすっかり大人のそれになつてましたのです……獸に襲われないよう、気を張り詰めて…でも、必死になつて急いで、ようやく教会にたどり着いた頃には、もう頭上の雲も、随分と淡くなつていました。西の方を見ると、空が少しだけ明るく茜色に輝いています。もう夕方なんです。

大きく肩を上下させながら、ラッセンは大きな岩の陰に隠れると、

初めて少し休みました。公園墓地は、教会の裏手にあります。でも、そこに行くには崖の端を歩かなくてはなりません。距離は短いのですが、ラッセンにしてみれば、とても危険な所なんです。

呼吸が戻ると、すぐに立ち上がります。手足は痛みますが、ベッドの上のアンジエレッタを思い出すと、とても休んでなんかいられます。

風は少しおさまりかけています。ラッセンはすぐに教会の東側を回ると、公園墓地へと向かう細道に入りました。

ここで身を隠してくれるものは、まばらな草だけです。それも丈が低いので、獣からは守ってくれないでしょう。ラッセンは足を早めながら、一気にここを通り抜けてしまうつもりでした。

暗がりの中、遙か右下にはロートウ川が見えています。昨日の雨のためでしょうか、水は茶色く濁り、激しく渦を巻いています。そこまでは、何も掴まる所が無い垂直の壁なんです。でも、ラッセンは恐いとも思いませんでした。ただひたすらに、墓地に着いてアンジエレッタのお兄さんに報告する事だけを考えていたんです。

不意に、左手の方で草が鳴っています。一瞬、ラッセンが立ち止まってそちらを向いた時……

……凄まじい突風が、ラッセンの体を持ち上げていました……

「うわああー！」

あつと叫う間の事だつたんです……本当に、あつと叫う間の事だつたんです……

悲鳴は……ただ、空しく川に向かつて落ちていぐだけでした……

「アンジエレッタ、気分はどう?……?」

お母さんはアンジエレッタの簡単な夕食を手に、そつと静かに部屋の扉を開けていました。

でも、返事はありません。

薄暗い空氣の中での、ベッドに横になつてゐる姿が見えています。

「眠つてゐるのでしょうか。」

お母さんが近付いてみると、顔にはとても穏やかな微笑みが浮かんでいました。とても、幸せそつなんです。見ている者までが、胸の中を温かくしてもらひえるような、そんな優しい笑顔をしているんです。

お母さんは、少し涙ぐみながらアンジエレッタの額にキスをしようと身をかがめました。でも、その時、何かがおかしいことに気が付いたんです。顔を寄せても、呼氣が感じられなかつたんです！

見れば、幼い胸も上下に動いていません…

夕食の入つた器が、力無く床へと滑り落ちていきます。激しい音が鳴り響いた直後、お母さんは鋭い悲鳴を上げて部屋を飛び出していました…

お父さんに呼ばれて、すぐに隣町からお医者さまが来てくれました。でも…もう、何も出来なかつたんです…

お母さんが氣も狂わんばかりに泣き続けています。その後ろで、お父さんは立ち上がつたお医者さまに頭を下げていました。

「…全ては御心のままに…アンジエレッタは神に望まれ、召されたんです…」

黙つて、お医者さまは頷きました。そして、もう一度アンジエレッタを振り返ります。

「…不思議な笑顔です…まるで、《全て》をやり終えたよつな…そんな、安らかさを感じます…」

しばらくして流れ出した言葉の後、部屋には痛ましい泣き声だけがいつまでも残り続けていました…

「うう……ん……」

「気が付いたかい？」

静かな声が聞こえます。ラッセンは、その言葉にうながされるように、そっと黒い瞳を開きました。

昇り始めた月が、銀色の腕を伸ばしています。その光の波を背にして、大きな人影がラッセンを覗き込んでいました。

「あれ……僕……」

ええ、崖から落ちたはずなんです。その証拠に、すぐ近くにある茂みの向こうからは、ロートウ川の荒々しい、かみつくような流れの音がしています。

でも、何処にも怪我はしていません。いいえ、体中の痛みや疲れも無くなっているんです。手足の泥までが綺麗に消えました。

「思つたよりも、早く目が覚めて安心したよ」

そう言って、頭上から見下ろしている人影は楽しそうに笑いました。ふと、その笑い声がアンジェレッタに似ている気がして、ラッセンは改めてこの人間を見上げました。

月明かりでも、黒髪と青い瞳は分かります。十五歳ほどでしょうか、とても落ち着いた雰囲気があるんです。どうしてかは分かりませんが、ラッセンはこの若者を危険だとは思いませんでした。

「僕はフィオラ。君は？」

「え？ あつ、ラッセン……」

「ラッセンか。よろしく」

差し出された指先を両手で包んだ時、初めてラッセンは大切な事に気付いて叫んでいました。

「フィオラ？ ジヤ、ジヤあ、アンジェレッタのお兄さんなんですね？」

「ああ、そうだけど」

フィオラも驚いた顔をしています。そんなフィオラに、ラッセンは急いでここまで来た訳を話していました。

「アンジエレッタが、とても会いたがってるんです。話をしたがってるんです。あなたの所に行けるんだ、って……それだけを伝えたくて……ずっと、ずっとアンジエレッタはそう願い続けてきたんです。でも、アンジエレッタはもう部屋を出る事も出来ないから……僕には、とてもアンジエレッタの想いを『全て』伝える事なんて出来ません。でも、アンジエレッタが心から悲しんでいる事だけは、知つてもらいたかったんです。

もう……これが、僕に出来る……アンジエレッタの最後の願いになるかも知れないと……」

泣きながら、ラッセンは話し続けています。涙は真剣な光を宿す黒い瞳から次々と溢れ出し、精悍な頬を伝い落ちていくんです。でも、ラッセンはそれを拭おうともしませんでした。ラッセンは、男の子です。でも、泣く事が全て悪い事とは限らないんです。自分の想いのままに語り続けるラッセンは、もしかすると泣いている事すら気付いていないのかも知れません。ラッセンはただ、自分の想いに正直に振舞つているだけなんです……

涙を流しながら……でも、静かに話し続けているラッセンを、フィオラは温かく見守つていました。とても柔らかな光を映している青い瞳は、しつかりとラッセンの『言葉』を受け取つています……

「……お願いです……アンジエレッタの願いを叶えてあげて下さ……」

「ラッセン……」

濡れた瞳は、じつとフィオラを見上げてきます。その視線に對して力強く頷くと、フィオラはポケットから一枚の紙を取り出しました。

「なら、これを君の手から、アンジエレッタに渡してくれないか。これを持つていれば、必ず会えるから、と……

そして、僕はいつまでも待つているから……そう、伝えてもらいたいんだ

「うん!」

勢いよく、頷いています。ラッセンはその大きな紙切れを受け取

ると、何とか小さくして髪飾りの入っているポケットと一緒に仕舞いました。

すっかりと晴れ渡った夜空から、月は四方へ銀の矢を放っています。その美しくも静かな矢を浴びながら、ラッセンはフィオラにスイールの町の入り口まで運んでもらいました。

「じゃあね、ラッセン」

「うん、じゃあね！」

きっと、フィオラはアンジエレッタの想いを分かってくれたはずです。その事を早くアンジエレッタに知らせたくて、ラッセンは大きく手を振ると、すぐにフィオラに背を向けてしました。

銀色の輝く腕は、フィオラの体をゆっくりと包み込んでいきます。ちぎれた雲の一片がその月明かりを弱めた時、フィオラの体は薄れていく光の中へと溶け込み、やがて見えなくなってしまいました。

月の光は、アンジエレッタの部屋の中にも射し込んでいます。今は、もう部屋には誰もいませんでした。お医者さまは帰りましたし、お父さんはお母さんを支えて下りてしまつたんです。斜めに覗き込んでいる月の光は、ベッドの上のアンジエレッタだけを優しくそっと照らし出していました。

「アンジエレッタ！」

本棚の隙間から、声が飛び出します。その喜びに満ちる呼びかけに、アンジエレッタはうつすらと青い瞳を開けていました。

「ラッセン……」

「アンジエレッタ、アンジエレッタのお兄さんに会つてきましたよー！」

「ラッセン！」

慌てて上半身を起してしまいます。その元気そつた姿に、ラッセンはいつそう嬉しくなつて話していました。

「そつなんだ、会つて話をしてきたんだよ」

「まさか、公園墓地まで… そんな危険な事を…」

「いいんだよ、それは。アンジエレッタのためなんだからね」

「でも…」

「嬉しいんです。嬉しいんですけど…」

「駄目だよ、アンジエレッタ。自分を責めたりしないで。アンジエレッタだって、僕のために悲しんだり苦しんだりしてくれてるんだから…」

「もう、何も言わないで… 約束してくれるかい?」

「…ええ、ラッセン。ありがとう…」

濡れた瞳で、にこりと微笑んでくれます。ラッセンは、そんなアンジエレッタの笑顔に優しく笑みを返していました。

「…アンジエレッタのお兄さんもね、そんな感じで笑つてくれたよ」

「ラッセン…」

「ちょっと、恥ずかしくなつて頭を伏せてします。でも、アンジエレッタはふと氣が付いて、ラッセンを真つ直ぐに見つめていました。

「でも… フイオラお兄さまは、もう亡くなられたのよ…?」

「え?」

「そうなんです。アンジエレッタは、フイオラお兄さまのお墓に行きたかったんですから…」

「じゃあ…夢だったのかな…?」

「でも、確かにラッセンは話をしたんです。ええ、こいつはアンジエレッタと話しているよ!」

ラッセンの右手が、自然とポケットの辺りをさまい始める。その中に何が入っているのかを不意に思い出して、ラッセンはポケットに手を入れました。

その手は、一枚の紙切れを持って出てきます。そうです、確かにこれはフィオラからもらったものなんです…

「でも、ほら…僕は、これをアンジエレッタに渡してくれるよ!」

頼まれたんだよ。これを持つていれば、必ず会えるから、って…」

つまでも待つてこらから、つて……

「お兄さまが……」

本物である事を確かめるよう、アンジエレッタは白い腕を伸ばしました。

月の優しい光が、その腕を銀色に輝かせてくれます。

ラッセンも、その小さな体を月明かりに照らされながら、精いっぱい両手に紙を広げて差し出しました。

細くしなやかな指先が、紙の端に触れようとしています。アンジエレッタが、その紙の存在を受け入れた瞬間……

「うわっ！」

「きやっ……」

二人の手にしている紙が、とてつもなく眩しい銀色の光を放ったんです。

……アンジエレッタもラッセンも、思わず目を強く閉じてしましました……

すっかり雲を追い払った空では、銀色の月が穏やかな表情でスイールの町を見下ろしています。ロートウ川を煌かせるその腕は、冷たさの増した風と共にクリーム色の町の中へと入り込み、アンジエレッタの部屋の窓から中を覗き込んでいました。

優しい微笑みを浮かべた少女が、ベッドの上で静かに横になっています。その頬を柔らかく照らしながら、崖下に横たわる少年と同じく、月の光は少女にも惜しみない銀の輝きを分け与えていました

レフリゲリウム

そは 時間の鎖と 久遠の海

一つを結ぶ 黄金の鍵

微かな、心地好い揺れが伝わってきます。

その震動に誘われるようそっと目を開けてみると、柔らかな春の陽射しが優しく、青い瞳の中へと飛び込んできました。

右手の窓から、その暖かな光は射してきます。斜めに走る光の帯は、そのまま車内に入ると、古い木の板で出来た床の上に広がり、瞬いていました。

汽車の天井には、昼間でしたが、夕陽色をした炎のランプが揺れています。左右に振れるランプをしばらく見つめた後、少女は白くしなやかな指先で、自分が腰掛けている座席を触ってみました。少し、堅い感じがします。でも、座り心地はそれほど悪くありません。…ここは、いつたい何処でしょう。この汽車は、いつたい何処へ行こうとしているのでしょうか……

十一歳の少女が考え込んでいる間にも、汽車は音も無く線路上を滑っていました。少女が座っている窓からは、鮮やかで若々しい緑をした草原が、ずっと遠くまで広がっているのが見えています。風の清らかな腕が、その草々の頭をそつと撫でては通り過ぎているんです。その様子がとてもはつきりと見えたので、遠くの景色なのに、静かな音色が車内にまで聞こえてくるようでした。

ふと、優しい瞳が向かいの席に移ります。その時、突然、そこには一人の少年の姿が現れていました。

少年は、じつと窓の外を見つめています。吹き込む風に短い黒髪が乱れ、正直な色をたたえた黒い瞳が、そつと細められます……ええ。確かに、以前にこの少年を見た事があります。でも、その時はとても小さかったので、もつと幼く感じられたんですね。十歳だと聞いていたのに、何だか、今、目の前にいる少年は、随分と大人びて見えます。

じつと見つめていると、少年がその視線に気付き、振り返つて微

笑みかけてきました。

「どうしたの？ アンジェレッタ」

白くて雪のようなアンジェレッタの頬が、ほんのりと赤く染まつていきます。胸元まで赤くなっているのが自分でも分かつたので、アンジェレッタは思わずうつむいてしました。

胸がどきどきしています。とても大きな音で、今にもラッセンに聞こえてしまいそうなんです。アンジェレッタは、その音を少しでも抑えようと、可愛い両手を重ねて胸元に押し付けました。

ラッセンも、健康そうなアンジェレッタから照れたように目を逸らしていました。いつも見ていたアンジェレッタよりも、今、目の前にいるアンジェレッタの方が可愛く思えるんです。それは、同じ大きさになつているからかも知れません。ベッドで横にならずに、自分と同じように生き生きとしているからかも知れません。でも、ラッセンにとつてはどちらでもいい事です。アンジェレッタがこうして元気でいる… それが、ラッセンにとつては一番素敵な事でした。一人とも、ずっと黙り込んでいます。でも、声にしない黄金色の言葉は、無数に一人の間を飛び交っていました。

だからこそ、一人は少し恥じらいながらも… やがて、真つ直ぐに互いを見つめると、幸せそうに笑みを交わせたのです……

「ほら、見て。ラッセン」

窓の外をずっと見ていたアンジェレッタが、不意に草原の向こうを指差しました。ラッセンも見てみると、そこには七色の光が次々と生まれては流れていったんです。

「つづらと輝きを弱めた最初の光は、次に来た波に飲み込まれてしまします。でも、その奥からは、どんどんと新しい光の帯が走り始めているんです。

「何だろ？？」

「虹の海ですわ」

急に後ろから声がしたので、一人は驚いて振り返っていました。

通路の向こう側の席に、いつのまに入ってきたのか、一人の女性が座っています。透き通るような金髪を背に流している女性は、太陽のような深みのある金色の瞳で、一人ににこりと微笑んで言いました。

「あの浜辺では、虹の砂が虹色の海と溶け合っているのですよ  
何だか、何処かで耳にしたような声です。優しく包み込んでくれるような、温かくて懐かしい声なんですね…

「あの…あなたは…」

ラッセンがようやく口を開くと、その女性は僅かに微笑を深めて応えてくれました。

「私が誰であるかなど、『本当』に理解出来る方はいません。ですから、私は幾つもの名前を戴いているのです。ある所では、私は一二郎とも呼ばれています。ですが、ここではアンナと呼んで下さるのが一番似合っているのでしょうか？」

「アンナ、さん…あの、ここは何処なんですか？」

少し、声が小さくなってしまいます。アンジェレッタには、このアンナさんと話をする事が、とても凄い事のように感じられたんです。僅かな一言が、とても重いものになりそうなんです。

「『ここ』と呼ばれる場所は、『時間』の中でしか存在しないものです。ですから、フロフスには『ここ』と言つ場所はありません。いいえ、『在る』や『無い』といった言葉も、『影』の世界での意味とは異なつているのです」

ラッセンもアンジェレッタも、アンナさんの言つている事はよく分かりませんでした。でも、その『言葉』は深く胸に刻み込まれていたんです。それは、きっと、分かつた事と同じなのでしょう。何かを知る事は、『時間』に縛られた行為ではないのですから…

その時、少しずつ汽車は速度を緩め始めました。

やがて…小さな駅に着くと、静かに止まってしまいます。

「あつ…」

白く眩しいほどに輝いた駅の柱には、『虹色海岸』と書かれた看

板が打ち付けられています。見れば、虹色に光る波が、これも虹色にさんざめく砂浜へと、すぐそこまで打ち寄せているんです。二人の耳には、優しい潮騒がはつきりと聞こえていました。

「行つてみようよ、アンジェレッタ！」

「でも、降りてしまつて大丈夫なの？」

アンジェレッタが不安そうにラッセンに尋ねているのを見て、通路の向こうにいたアンナさんは静かな笑みを零して言いました。

「大丈夫です。動く時には、その知らせがあるものです。あなたがたは、その『声』を聞けるはずですよ」

「さあ、行くよー、アンジェレッタ」

アンナさんの言葉を考える間も無く、アンジェレッタはそのしなやかな指先をラッセンに預けていました。

通路を走り、汽車の扉を抜けて温かな光の世界へと飛び出しながら、アンジェレッタは不思議な気持ちで自分を引っ張つてくれるラッセンの手を見つめっていました。

今思えば、こうして手を握る事も初めてなんです。ラッセンが小さかった頃には、いつもアンジェレッタがラッセンを運んだり、導いたりしていました。でも、これからは違うんです。アンジェレッタは、ラッセンに身を任せてもいいんです。

また、胸がどきどきしてきます。とっても素直な気持ちで、アンジェレッタはこの素敵な出来事を受け入れていました。

駆けていく一人の足下では、小さな砂粒が高い音色を放ちながら、次々と輝きを強めています。それは七色の渦を作ったかと思うと、並んでいる二人の足跡をゆっくりと順番に消していきました。

「広いんだねえ」

波打ち際まで来ると足を止め、ラッセンが驚いたように咳いています。森で育ったラッセンは、海を想像の中でしか見た事が無いんです。いいえ、それはアンジェレッタにしても同じです。アンジェレッタだって、本の中の海しか知らなかつたんですから。

とても静かな雰囲気です。これだけ大きいのに、少しも恐さを感じないんです。いいえ、それどころか、アンジエレッタはこの虹の海に優しさを覚えていました。手を差し伸べたら、そつと握つて励ましてくれるような気がします。きっと、泣きそうになつたら、慰めるように自分の体をそつと包み込んでくれるでしょう。…

…ええ…ラッセンの言葉のように…

黙ります。どうしても、引き引きしてしまいます。真っ赤になつている自分を知られないように、アンジエレッタはラッセンの手から指を抜いて、砂浜にしゃがみこんでしました。

七色の線がすぐ足下まで滑つてきては、さらさらと美しい音を届けて、また沖合いへと戻つていきます。その波に手を浸したかと思うと、すぐにアンジエレッタは驚いて両手ですくいあげていました。

「見て、ラッセン」

「どうしたんだい？」

アンジエレッタは、両手を高く差し上げています。その中を覗き込むと、ラッセンも驚いて叫んでしました。

「この海も、砂で出来てるんだ！」

ええ、そうだったんです。アンジエレッタがすくいあげたのは水ではなく、浜辺のものよりもずっと細かな砂粒だったんです。

指の隙間から溢れ落ちていく砂が、小さな可愛い虹を作つています。よく見れば、一粒一粒が七色に次々と変化しているんです。

ラッセンもその波打ち際に座り込むと、自分の手に砂を集めています。並んで腰を下ろした二人は、いつまでも飽きる事無く砂粒の光の誕生を見つめていました。

どれだけの時間が流れたのでしょうか。

いいえ…確かに太陽は半分くらいまで昇つてしましましたが、何だかここには『時間』なんて無いような気がします。太陽は、きっと自分の思い通りに動いているだけで、『時間』なんて気にしていないのでしょうか。

アンジェレッタは、雪よりも白くて細い…でも、健康そうな足で砂浜を走っています。虹色の波を追いかけたかと思うと、次には楽しそうに逃げているんです。その可愛らしい唇からは明るい笑い声が溢れ出し、澄んだ青い瞳はきらきらと輝いていました。

黒い髪を風に遊ばせて、太陽の柔らかな陽射しを浴びているアンジェレッタを見ながら、ラッセンは眩しそうに目を細めしていました。ベッドに横たわっていた時のアンジェレッタも、ラッセンにはとても大事でした。でも、こうして元気に笑ってくれるアンジェレッタは、もっと大事に思えるんです。なんて素敵な微笑みなんでしょう！ ラッセンには、アンジェレッタが本当に天使になつたのかと思えるほどでした。

「ラッセン…」

そつと見守ってくれる黒い瞳に気付いて、アンジェレッタはふと足を止めてしまいました。それでも、柔らかな視線は動こうとしません。不意に白い頬に赤みがさし、アンジェレッタは恥ずかしそうに目をうつむけると囁きました。

「そんなに見ないで…わたし、何処かおかしい…？」

「ううん、そんな事ないよ。とつても綺麗だよ、アンジェレッタ」ラッセンの真剣で力強い言葉に、アンジェレッタはどうしていいか分からぬほど真っ赤になってしまいました。でも、嬉しいんです。とても嬉しいんです。

「ありがとう…」

でも、それだけしかアンジェレッタには眩く事が出来ませんでした：

ラッセンだつて、素敵なんです。小人だつた時も大切でしたが、今はもっと、アンジェレッタにとつてラッセンは大切な人でした。でも、それがどうしても言えないんです。伝えたくて…知つてもらいたくて…

でもやつぱり、アンジェレッタには、まだ何も言えませんでした。何となくアンジェレッタもラッセンも黙つてしまつた時、突然、

一人は同時に『何か』を聞いたような気がしました。いいえ、耳に聞こえたのではありません。胸の奥の方から、静かで動く事も少ない心の下の方から、その『声』は届いたんです。

「さあ、戻ろうか、アンジェレッタ。汽車が出るみたいだよ  
「ええ」

すつと右手を出してしまいます。自分がそんな仕草をしている事にアンジェレッタが気付いた時には、もうその手はしっかりとラッセンが握っていました。

でも、それが自然な事のように思えます。ええ……この手は、きっとラッセンの中にある事が『本当』なんです……

虹色の浜辺を走りながら、アンジェレッタは幸せな微笑みをいつまでもその頬に浮かべ続けていました。

『虹の海』 おわり

## 6・クスノキの原

アンジェレッタとラッセンが向かい合わせになつて席に着いた瞬間、何の合図も無しに汽車が走り出しています。白い柱が並ぶ無人の駅舎は、北を巡る日輪の光に日映く照り映えながら、去つていく汽車の後ろ姿を静かに見送っていました。

右手の窓からは、遠くまで虹の海が見えています。静かで深い潮の音色が、車内へと満ちてくるんです。アンジェレッタとラッセンはその音に誘われるよう、一緒に窓辺に並ぶと、打ち寄せる七色の砂をいつまでも眺めています。

やがて、汽車は左へ……南へと緩やかに曲がりうつとしています。少しずつ、虹色の波が遠ざかってしまいます。半分くらいまで昇った太陽の光で眩しく輝いている海原が、低い丘の向こうへと消えていこうとしているんです。

七色の煌きが草々に完全に隠されてしまった時、アンジェレッタは少し悲しくなつてしましました。あんなに大きくて優しいものを、もう見る事は出来ないです。

黙つて窓から離れ、座席に腰掛けると俯いてしまいます。その時、膝の上でしつかりと重ねられた小さな手に、力強い手がそつと加えられました。

「ラッセン……」

黒い瞳が、励ますように覗き込んでくれます。アンジェレッタが悲しみに染まる顔を上げると、ラッセンは更に手に力を込めてくれました。

「……ありがとう……」

どうして、それだけしか言えないんでしょう。こんなにも、ラッセンは多くの『言葉』で話しかけてくれるのに……

「……アンジェレッタ。あの海は消えたりしてないんだよ。何処にでも……ここに、だつてあるんだ。僕には……アンジェレッタの中に、あ

の虹の海が感じられるんだよ……」「そんな……」

嬉しいんですが、それは違います。海があるとすれば、それはラッセンの中にあるんです。いつも、悲しい時に励ましてくれるラッセンこそ、アンジエレッタにとっては虹の海なんです。

小さく頭を左右に振るアンジエレッタに、ラッセンはにこりと笑つていました。その目は、どれだけ否定しても、ラッセンがアンジエレッタをあの海だと思つている事を物語っています。

アンジエレッタが、このもりいすぎの贈り物に口を開こじつとした時、通路の向こう側から温かな声が聞こえてきました。

「虹の海は、あなたがた一人の中にあるのですよ」

「アンナさん……」

二人の視線の先で、アンナさんは穏やかに微笑んでいます。

「それでいながら、海は『一つ』しかありません。アンジエレッタの中の海も、ラッセンの中の海も、『同じもの』なのです。それが『本当』なのだと、分かっているのでしょうか？ それを信じていればいいのです。『真実』は認められ、信じられるに値するものなのですから」

「…………はい」

二人は頷くと、互いに向き合いました。青と黒の瞳が相手を真つ直ぐに見つめています。

次には、二人の頬には素晴らしい微笑が零れていきました。

海岸を離れ、汽車は青草の繁る草原を走っています。地平線が見える辺りまで、何処までも草の原は広がっているんです。白く霞む空の裾野まで満ち溢れている緑に、思わずアンジエレッタはみどれてしましました。

緑といっても、一つの色ではないんですね。

「見て、ラッセン。綺麗な若草色……」

「本当だね。ほら、今見えてきた辺りは萌葱色だよ

「その横は、金色に輝いているのね」

黄緑や黄、白や深緑に浅緑…と、たくさんの色を見付けていきます。そんな楽しげな会話を運んでいく風によつても、草の色はどんどんと変わっていくんです。

ずっと遠くまで広がっているのは、確かに同じ背丈くらいの草ばかりです。でも、よく探してみれば、小さな草だつてあるんです。同じように見える草でも、その一つ一つが違つた色を持っています。そして、だからこそ、これだけ集まればとても素晴らしい草原になるんでしょう。

銀色の優しい風は、そんな青草の頭に少し触れながら、何処までも進み続けています。頭を撫でられた草が、陽光に煌いてそんな風を笑つて見送つています。アンジエレッタには、その可愛くて愉しそうな声までが聞こえてくるようでした。

ベッドで横になつていた部屋の外には、こんな素敵な風景があつたんです。アンジエレッタには、これらは全部、本の中の想像の出来事でした。

でも、今は違います。こんな素晴らしい景色を見ているだけでなく、実際に入つていく事も出来るんです。

ラッセンと一緒に……

アンジエレッタは思うんです。景色はとても美しいものです。でも、ラッセンが隣りにいるからこそ、同じように傍で笑つてくれているからこそ、この風景は素敵なものになつてているんです。ええ、きっとそうです。ラッセンがいなければ、この美しい風景も、ただの『絵』でしかなかつたでしょう……

ラッセンとは、つい数ヶ月前に逢つたばかりのはずです…不思議なんです。どうやって、それまで自分は喜びを感じていたのでしょうか…？ アンジエレッタには、どうしても分かりませんでした。だいたいにして、ラッセンのいない『時間』そのものが信じられないんです。ラッセンはいつでも傍にいてくれます。それが『本当』なんです。きっと、ラッセンと逢うまでの時間は間違つたんだ

しゃべ。

そのラッセンは、アンジェレッタの横で窓の外を見つめています。アンジェレッタはそんなラッセンを見上げると、ずっと、いつまでも目を逸らそうとはしませんでした。

風にそよぐ緑の上には、何処までも澄み渡った青空が広がっています。とても深くて、どんどんと吸い込まれてしまいそうなくらいに綺麗なんです。そんな青い天井に、薄い雲が、まるで刷毛ではいたように一筋だけ描かれていました。

ラッセンがそんな青空から視線を下に戻した途端、急に目の前がぱあーっと黄一色に染め上げられました。

「うわー！」

「まあ……」

アンジェレッタも青い瞳を大きくすると、じつと新しい風景を眺めています。

草原が、一瞬にして菜の花に覆われたんです。鮮やかに燃え上がるような黄色い花が、地平線の向こうまで、本当に、余す所無く満ち溢れているんです。二人の目の前で、太陽に照り輝く金色の花は、緩やかにうねりながら何処までも続いていました。

「綺麗だね……」

ラッセンには、それだけしか呟けません。いいえ、アンジェレッタなんて、何かを口にする事も出来なかつたんです。

喜びを満面にたたえているアンジェレッタの横顔を見付けると、ラッセンは優しく微笑みながら、そこから目を放そうとはしませんでした。この幸せな表情を、もつ一度と曇らせてはいけません。病気なんて、一度とさせるもんですか。アンジェレッタは、いつまでもこつして喜びと楽しさに抱かれているべきなんです。

純真な黒の瞳が、強い決意に染まります。ラッセンは、もうしばらく優しいアンジェレッタの横顔を見つめた後、視線を窓の外に向けました。

見れば、前方から大きなクスノキが近付いています。なんて大きいんでしょう！ 一面の菜の花から顔を覗かせている、短い草の生えた丘の上で、そのクスノキは堂々と太陽に向かつて両手を広げて立っていました。

濃い緑色の葉と、黒い葉影が見事な模様を描いています。その絵柄の中に、時々、風のいたずらで陽光に煌く銀の閃光が加わるんです。それらクスノキが纏う素晴らしい絵は、考えられないくらいに太い幹によつて、しつかりと支えられていました。

何ものにも負けない、力強い雰囲気が辺りに放たれています。でも、何処か優しさも感じるんです。風にゆっくりとしなる枝先のためでしようか、それともそこから流れ出している涼しげな音色のためでしようか。

「……静かね……」

アンジェレッタは、そう囁いています。風は、心地好い音楽を運んでくれているんです。それは、確かに聞こえています。でも、だからこそ……でしょうか。とても奥深いところで、沈黙がこの風景を包み込んでいる気がします。それは恐怖や悲しみを感じさせるものではなく、二人に安らぎと穏やかさを与えてくれるものでした。

あのクスノキの下まで、どうにかして行けないものでしょうか。ラッセンは、あの木の力と優しさに触れてみたかったんです。静けさに抱かれてみたかったです。

そう思つた瞬間、ラッセンは汽車の天井からさらさらと音が降つてくる事に気付きました。体には、光の泡粒が幾つも描き出されています。

「え……？」

思わず見上げた先では、緑濃い無数の葉が重なり合つていました。風に揺れるたびに、その緑色の光は濃くなつたり薄くなつたりしています。そして、その枝葉の隙間から零れた光が、ラッセンの体に丸い泡を作り出していたんです。

腰を下ろしている丘は、短く丈の揃つた草に包まれクスノキを囲

んでいます。丘の周りには、汽車の窓から見えていた可愛らしい菜の花が、ずっと遠くまで見えていました。その菜の花にそつと触れてきた風は、ラッセンの頭上で葉擦れの音を奏でては過ぎていきます。落ちてくる澄んだ音色の、涼やかで綺麗な事といつたら… アンジェレッタの笑い声くらい、素敵なんです。

丘に座って、笑いながら葉影に抱かれていたラッセンは、その時ふと、アンジェレッタがいない事に気付きました。とても驚くと同時に、悲しみと恐ろしさが胸の中に湧き上がってきます。さつきまで楽しい気持ちなんて、もう何処かに消え去っていました。

アンジェレッタがいなければ、この素晴らしい風景も意味を持たなくなるんです。今、ラッセンは独りでした。これからも、ずっとそうなんでしょうか…

いいえ。アンジェレッタがいなくなるなんて、そんな事はあります。そんな世界は、『嘘』でしかないんです。アンジェレッタが一緒にいるからこそ、頭上の青空は澄み切っているんです。アンジェレッタと見ているからこそ、菜の花は鮮やかな愛らしい黄色に染まっているんです。アンジェレッタといるのでなければ、このクスノキも力と優しさを失つてしまい、沈黙は重く苦しいものになってしまうでしょう。

ラッセンは、大急ぎでアンジェレッタを探そうと立ち上がりました。その時、腕に細くしなやかな指先が絡まってきたんです。その温かな感覚に想いを寄せた瞬間、ラッセンは汽車の中に座っている自分を見付けていました。

「ラッセン… よかつた…」

目の前で、アンジェレッタが微かに濡れた目をしています。

「アンジェレッタ…？」

茫然としているラッセンに、アンジェレッタは心を落ち着けると何とか笑う事が出来ました。

「ごめんなさい… ラッセンが急にいなくなつたような気がしたから、わたし… 何でもないの、ごめんなさい…」

でも、白い指先は、いつそうしつかりとラッセンの腕に掴まつてきます。ラッセンは、そのいじらしい指先を自分の手で包み込むと、そつと微笑んでいました。

「ありがとう……アンジェレッタ。……いつまでも、一緒だよ」「ラッセン……」

ええ、そうですとも。これからは、ずっと一緒にいるんです。いつまでも、何処までも、アンジェレッタと一緒にいるんです……美しい赤に頬を染め上げているアンジェレッタは、恥ずかしそうに、でも嬉しそうに微笑んで頷いてくれます。その時、二人は『何か』に……『声』に導かれるように、共に窓の外を覗いていました。大きく縁の翼を広げたクスノキが、菜の花の海の真ん中で、後ろへ遠ざかっていこうとしています。そのクスノキが作る木陰には、今、一人の女性がたたずんでいました。

「アンナさん……！」

ええ、そうなんです。あの透き通るような金髪は、アンナさんに間違ひありません。

アンナさんは、透明なくらいに白くて細い両腕を、静かにそつとクスノキへと伸ばしています。その調つた美しい指先が、歳を経た幹まで届いた瞬間……

「あっ！」

アンジェレッタもラッセンも、思わず声を上げてしまいました。クスノキの枝先に、幾つもの白い花が咲き始めたんです。六枚の花弁を持つ可憐な花々が、次から次へと、無限に咲いていくんです。雪を散らしたように、白く小さな光は縁を背にして眩しく輝いています。

なんて綺麗なんでしょう。  
なんて優しいんでしょう。

胸の奥から、不思議な音色が湧き起つてくるようです。その心の高鳴りに合わせて、アンジェレッタの瞳からは、柔らかな真珠が溢れ落ちていました。

クスノキは、次第に小さくなつていきます。でも、二人は互いに手を握り締めたまま、いつまでもその姿を見送つて目を放そうとはしませんでした。

『クスノキの原』 おわり

菜の花は、現れたときと回じよひに無くなってしまった。今、二人の目の前では、若々しい緑色をした草のじゅうたんが、青空をくつきりと切り取つてしまつています。いったい、この草原は何処から続いているのでしょうか。そして、何処まで広がつていくのでしょうか。

（ううん…）

きっと、『場所』なんて存在していないんです。アンジエレッタは、アンナさんが教えてくれた言葉を思い出していました。この草原は、何処にでもあるんです。でも、何処にも無いんです。おや？ そこで、アンジエレッタはちょっとと考え込んでしまいました。何だか分からなくなつてきたんです。

「どうしたんだい？ アンジエレッタ」

向かいの席から、ラッセンが首をかしげて話しかけてくれます。でも、アンジエレッタにはうまく説明することをえ出来ませんでした。

「ううん… 何だか、よく分からなくて…」

何が分からないのか、これではラッセンにはむつと分かりません。田をぱちくりさせてくるラッセンに、アンジエレッタは困った顔をしてしまいました。

ラッセンは、いつもアンジエレッタのことをよく分かってくれています。それは、声にはしていない事でも同じでした。でも、だからといって全てを知つてくれているわけではありません。やつぱり、口にしなくてはならない事もあるんです。

こんな時、ちょっとラッセンを遠く感じてしまいます。アンジエレッタがどれだけ頑張つても、ラッセンは『他人』のままなんです。でも……ええ、アンジエレッタには解つていました。

『他人』だからこそ、こんなに『大好き』になれたんです。

『本当』に好きになれたんです……

……どうしたらいいんでしょう。胸元まで赤くなつてしまつんです。どきどきしてしまつんです……それが嬉しいのに、何だか恥ずかしい氣もするんです……

こんな気持ちも、ラッセンは分かつてゐるんでしょうか……

つづむけた瞳をちらつと上げて、ラッセンの顔を見てしまいます。その視線に応えて、ラッセンは温かく笑つてくれています。それがまた嬉しくて、恥ずかしくて……

慌てて、アンジェレッタは窓の外に顔を出してしまいました。ずっと以前、ラッセンが小さかつた頃の自分とは、随分と変わつてしまつたように思えます。でも……今の方が素直な氣もするんです……

アンジェレッタは、柔らかな風の中で小さく溜め息を吐いてしました。何だか、『自分』まで分からなくなつてきました。

でも、どれだけ『自分』が変わつても、それは……

……ええ、そうです。ラッセンのためなんです……それだけは、アンジェレッタにもはつきりと分かつていました。

涼しげな陽光を、眩しそうにいっぽい受けっていた草原が、少しづつならかな丘へと変わつてきています。幾つもの低い丘が重なり合つて、柔らかな線を描いているんです。所々では小さな木立も見え始め、景色はいつそう豊かになつてきました。

太陽は、急いで北の空を転げ落ちています。早く、西の地平に入つて休みたいのでしょう。何だか、あつと詰つ間に夕方が来てしまいます。

ラッセンは、さつきから黙つて窓の外を見ています。でも、風景を眺めているように見えません。アンジェレッタは、その黒い瞳に映る光を見つめて、少しだけ勇気を出して尋ねてきました。

「ラッセン……何を考へてるの？」

「え？ あつ、うん……ごめん。アンジェレッタを一人にしちやつた

ね

慌てて振り返ったラッセンに、今度はアンジエレッタが急いで左右に首を振ってしまいます。

「つづん！」「めんなさい、そんなつもりで言つたんじゃないの…ごめんなさい、考え方を邪魔してしまつて…」

「邪魔なんかじやないよ。アンジエレッタと話すことは、他のどんな事よりも楽しいからね」

「ラッセン…」

二人とも、少しの間、黙ってしまいます。でも、やがて、ラッセンは変に乾いてしまった唇を少し舌で湿らせると、話しあしてしました。

「僕はね、この汽車がいったい何処まで行くのかな、って考えていたんだよ。でも、きっと『何処』なんて言える『場所』は無いんだろうな、って…だったら、この汽車は何処からも出発していないし、何処にも行くことはないんだろう…そう思つてたんだ」

「ラッセン！」

驚いた顔で、アンジエレッタは真っ直ぐラッセンの目を見つめていました。ええ、そうです。それは、ついさっき、アンジエレッタが考えていた事と同じだったんです。

「わたしも、同じような事を考えていたの。この草原は何処から続いている、何処まで広がっているのかしら、って…でも、『場所』が無いのなら、この草原は何処にでもあって…きっと、何処にも無いのかも知れない…そんな事を思つていたの」

「そうだつたんだ…同じ事を考えてたんだね」

にっこりと笑いかけてくれます。なんて温かいんでしょう。偶然でも、アンジエレッタには嬉しかったんです。いいえ、『本当』には『偶然』なんて存在していないのですが…

「でも、僕には分からんんだ。もしもそんなら、僕やアンジエレッタは、どうしてこの汽車に乗つて、この景色の中を走つてるんだろう？『何』がそこには存在してるんだろう？」

アンジエレッタにも、分かりません。

「あつ、そうだったね。アンジエレッタも、さつきよく分からぬ、つて言つてたよね」

「ええ……」

「何も存在などしていません。ただ、あなたがたはそうしなくてはならないから、この汽車に乗つて、この景色を眺めているのですよ」不意に、深くて静かな声が通路の向こうから聞こえてきました。

「アンナさん！ 戻つて来れたんですか？」

ラッセンが、驚いて叫んでいます。だつて、さつきアンナさんは、あのクスノキのそばに立つていたんです。あれから、汽車は一度も停車していません。

「ええ。戻つて来たいと思うなら、人はあらゆるといひに戻ることが出来るものなのです」

計り知れないほどに穏やかな微笑みは、アンジエレッタやラッセンの混乱していた心を、すっかり鎮めてしまいました。

「アンナさん……どうして、わたしゃラッセンは、こゝにしていなくてはならないのですか……？」

アンジエレッタの小さな問いかけにも、アンナさんはこゝのよく応えてくれました。

「では、アンジエレッタはこの旅をやめてしまいたいの？」

「いいえ、そんなことはありません！」

思わず、力強くアンジエレッタは答えていました。ラッセンと一緒にいられるのなら、アンジエレッタは永遠にこの汽車に乗つて、無限の果てまで行つても構わないと思つています。

「僕も、ずっとアンジエレッタと一緒にいたいと思つています」

「ラッセン……」

少し照れながら、でも真剣にラッセンはそう言つてくれたんです。アンジエレッタは、とても嬉しくて…青い瞳にうつすらと涙を浮かべてしましました。ラッセンも、一緒にいたいと思つてくれているんです。こんなに幸せなことが他にあるでしょうか。

「あなたがたが、そつ思つてこぬから」や、汽車はこの景色の中を走つてゐるのです」  
アンナさんは、優しい微笑でそんな一人をそつと見守つていました。

窓から斜めに射し込んでいる光芒は、アンナさんの透き通る金の髪を眩しく輝かせています。アンジエレッタとラッセンは、それ以上は何を言つても、疑問を口にしてもいけないような気がしました。『真実』は『全て』田の前にあつたんです。それが何よりも素晴らしい、最良の疑問であり、應えだつたんです……

汽車は、音も無く滑り続けています。下り始めた太陽に照らされながら、どんどんと南の方へと、自らが生まれてきた方向へと、汽車は速度を早めしていました。

今日一日、北の空をえつちらおつちらと昇り、頂上で昼寝をした後、駆け足で坂道を転がり落ちていた太陽は、ようやく地平線にたどり着こうとしていました。

アンジエレッタの瞳のよう、高く、青く澄み切つていた空は、今は淡く柔らかな茜色に染まつています。とつても温かそうで、見ていると、心がふんわりとしてくるんです。空から降つてくるその光は、通路の向こう側にある窓からふわあつと汽車の中にも入り込んできていきました。

ラッセンとアンジエレッタは、お互に顔を見合わせるとこつと笑つて席を立ちました。急いで、通路の反対側の席に移ります。でも、その時ラッセンはびっくりしたように言いました。

「アンナさん、何処に行つたんだろう？」

ええ、そうなんです。いつも座つていた席にはいなかつたんです。いいえ、それどころか、この車内の何処にも、アンナさんの姿はありませんでした。

「……ううん、違うわ。アンナさんは、何処にも行つていよいよ」

アンジエレッタは、そう言つてラッセンに笑いかけました。

「わたしたちの言葉では、『ここ』にいないの…でも、アンナさんは何処にでもいるのよ。アンナさんがいなくてはならない所に…ね」

「…そうだね」

ラッセンは頷くと、アンジョレッタの手を取つて窓辺に近付きました。

不意に、水の流れる音が、はつきりと耳に届いてきます。二人は草がさやさやとなびく丘を田にしたと思つた直後、窓の外にとても大きな川を見付けていました。

川は、右手の地平線の向こうから流れています。夕焼け色に燃える空から、綺麗な線を描いて流れ出しているんです。そして、それは汽車のすぐ傍を通り過ぎて、左手の空へと帰つていました。

「大きいね…」

それ以上、言葉が浮かんできません。夕陽の下の対岸が、随分と遠くに見えます。そのとてつもなく広い岸の間を、考えられないくらいたくさん水が、とうとうと流れているんです。

地平へと隠れてしまいそうな夕日で、その川の水は黄金色に輝いています。目を開けて見ていられないくらい、眩しいんです。なんて綺麗なんでしょう。一時も静止すること無しに、光は次から次へと変化していくんです。そして、その輝きは、少し前の輝きよりも更に美しいものになつていました。

「…………」

アンジョレッタは何かを言おうとして…でも、やめてしましました。何だか、声を出してはいけない気がします。こんなに大きくて、こんなに綺麗なのに…この川は、とても静かなんです。もしもアンジョレッタが口を開いても、きっとその声は押しつぶされて、この深い静寂の中に溶け込んでしまうことでしょう。

その時、窓枠に置かれていたアンジョレッタの小さな手を、温かなものが包み込んできました。見れば、ラッセンの手なんです。森に住んでいたためでしょうか。その手は、十歳にしては大きく、がっしりとしています。

(「ラッセン……）

「この夕焼け空のよう、温かいんです。ええ、本当に温かいんです……」

「さあ、今まで、アンジエレッタは『自分』が変わってきたよつた気がしていました。でも、このラッセンの手を見て思つたんです。本当に、自分は変わつたんでしょうか？　この手は、ラッセンの手の中にあることが『本当』なんです。なら、自分も、ラッセンのためになつて、変わつて、そのどれもが『アンジエレッタ』という本当の『自分』なんです。」

「……あつと……『自分』は、『ラッセン』のなかにあるのじょう……」  
もう、自分が分からなくなることも、自分を探すことも無いはずです。いつでも……ええ、そうですとも。いつでも、こんなに近くで見付けられるのですから……

「アンジエレッタ……」

優しい声がします。アンジエレッタは、夕焼けの茜色よりも、もつと鮮やかに頬を赤く染めながら、もう一方の手をラッセンの上に重ねていました。

「……ありがとうございます……いつも傍にいてくれて……『本当』にありがとうございます……」

「……」  
そう呟くと、アンジエレッタは心の奥から流れ出す黄金色の想いのままに、ひとつ……でも、しっかりとラッセンの手を握り締めました。

夕日が、川の向いへと沈んでしまいます。でも、茜色は空に残り、もうしばらく、幸せな一人の姿を柔らかく照らし続けてくれました。

やがて、とつぱりと田も暮れてしまい、汽車の外はあつと言つ間に真つ暗になつてしましました。

星が、その深い藍色の天井で瞬いています。でも、アンジェレッタにはどの光が一番星だったのか分かりませんでした。だつて、みんないつせにに、わつと飛び出してきたんですもの。

二人が星空をもつとよく見ようとした時、汽車がその速度をゆっくりと落とし始めました。大きな震動も、耳に入る音も無いままに、汽車は小さな駅に止まろうとしているんです。天井で揺れる夕陽色のランプは、窓からその駅舎の白い柱を微かに照らし出していました。

静かに、本当に静かに汽車は停車します。一両しかない汽車にふさわしい、とつても小さくて可愛らしい駅なんです。でも、温かな夕陽色の光に照らされてはいても、誰もいない駅はちょっとびり恐い感じがしています。

「降りてみようか、アンジェレッタ」

でも、ラッセンは平氣な顔でそう言つてくるんです。にっこり笑つてるんです。

「ラッセン…」

微かに声を押し出した瞬間、少し震えている細くてしなやかな指先を、ラッセンはしつかりと握つてくれました。

……ええ、ラッセンと一緒になら、恐いことなんて何もありません…  
真つ直ぐに、アンジェレッタはラッセンの顔を見上げて微笑んでいました。

「ほら、氣を付けて」

通路を抜け、扉から降りる時、ラッセンが先に立つて足を踏み出しています。そのつま先が石の床に触れた途端、アンジェレッタは

高く澄んだ、でも音になつていな『音』が周囲に広がった気がしました。それと同時に、ラッセンの足を中心に、青い光の輪が広がり始めたんです。

「うわあ…」

その透明な青の光で駅全体が輝いていくのを、ラッセンは茫然とした顔で見つめています。駅に降りることなんて、すっかり忘れてしまっています。青白く、駅の内側から放たれる光は、そんなラッセンとアンジェレッタをそつと、でも温かく包み込んでいました。どれだけの間、動かずそうして見つめていたのでしょうか。アンジェレッタにもラッセンにも、よく分かりませんでした。でも、『何か』が一人を同時に動かしてくれたんです。ラッセンはもう一つの足もホームに下ろすと、アンジェレッタを振り返りました。

…なんて綺麗なんでしょう…。ラッセンは、少しの間、息をすることも忘れてしました。何だか、初めてアンジェレッタを見るような気がします。そのアンジェレッタがそつと白くて美しい足を駅に下ろした瞬間、今度は青白い光の中に無数の煌きが生まれてきました。

銀色の星達が、空の仲間に負けないよう、一生懸命に輝いています。青い光に抱かれながら、その地上の星屑達はアンジェレッタの姿をいつそう綺麗に照らし出していました。

(アンジェレッタ……)

少し驚きながらも、微笑んでホームに降り立っています。でも、じつと自分を見つめたまま黙つているラッセンに気付くと、アンジェレッタは恥ずかしそうに視線を落としてしました。

「どうしたの…ラッセン？」

「ううん、その……綺麗、だよ。アンジェレッタ  
「ラッセン…！」

二人とも、これ以上無いくらい真つ赤になつてしまします。でも、その時、アンジェレッタは自分でも驚いたことに、少し濡れた瞳でラッセンを真つ直ぐ見上げていました。

「ありがとう…ラッセンも、とても素敵よ…」

虹の海辺でも、ラッセンは同じ言葉を語ってくれました。でも、同じ言葉なのに…『同じ』ではないんです。アンジェレッタには何が違うのか分かりませんでしたが、今のラッセンの言葉の方が、もつともうと嬉しかったんですね…

「ありがとう…じゃあ、行こうか

「ええ」

アンジェレッタはラッセンに安心して手を預けると、その腕に少し寄りかかりました。ラッセンも、力強く抱え込んでくれます。一人は、そつと、でも確かに足取りで駅舎から草原へと歩いて行きました。

駅から伸びる細い砂利道は、真っ直ぐ、小高い丘へと続いています。道の左右には、アンジェレッタと同じくらいの丈をした木が並んでいて、じつと、何も言わずに歩く一人を見つめています。

やがて、不意にその並木が無くなってしまいます。それと同時に、アンジェレッタとラッセンの田には無数の星の輝きが飛び込んできました。さまざまな色をした砂粒が、広い天井にびっしりとまき散らされているんです。しかも、これらの星は一人が知っているどんな星とも違っている気がします。もつと、若々しくて、明るくて、大きいんです。星達の並びも、一人には見慣れないものでした。

足下からは、しゃらしゃらと砂利を踏む音が立ち上ります。

一人はずつとそんな星達の煌く空を見上げながら、丘の上まで来るとようやく足を止めました。

何も言わずに、そつと腰を下ろします。

鮮やかに瞬く光は、アンジェレッタの青い瞳とラッセンの黒い目を捕まえて、なかなか放そうとはしてくれませんでした。

「凄いね…星つて、こんなにたくさんあつたんだ」

「ええ…」

何だか、これだけじっくりと夜空を見上げたのは久し振りな気がします。とっても綺麗で、懐かしくて…ほら、もうすぐそこに、手

が届く所に見えていいんです。ちょっと背伸びをすれば、さつと頭をぶつけてしまつに違ひありません。

そんな感じがするからでしょつか。アンジェレッタもラッセンも、とても小さな声で話していました。そして、時々、お互いを真つ直ぐ見つめでは幸せそうに微笑みを交わしています。

その時、東の空から少し青白い光が広がり始めました。

大きな翼は天井を駆け上り、星の輝きを僅かに弱めてしまつます。アンジェレッタとラッセンが驚いて目を向けた途端、波打つ丘の上から、不意に一筋の銀色の光芒が走り出しました。

月が昇ろうとしていたんです。

どんどんと強くなる銀色の光の波に照らされながら、アンジェレッタもラッセンも、ふと口を開ざして黙り込んでしまいました。

とつても遠い『時間』が思い出されます。

（わたしが、初めてラッセンを見た時も……）

ええ、そうです。その時、ラッセンは銀色の月の光の中で、少し寂しそうに踊っていました。今と同じように、綺麗な月の夜にアンジェレッタは初めてラッセンと出逢つたんです。

ラッセンも、覚えていました。アンジェレッタのために教会へ行つた時、月はその銀色の腕でそつと見守つてくれました。アンジェレッタのお兄さん、フィオラに会つた時にも、月はその後ろで輝いてくれていたんです。

「……いろんな事があつたね……」

随分としてから、ラッセンはそう呟きました。アンジェレッタも、そつと頷きます。

「ええ……楽しかつた事も、そうでなかつた事も……本当に、たくさんあつたわ……」

そう呟つたアンジェレッタを、ラッセンは真面目な顔で見つめました。

「つうん、違うよ。アンジェレッタ……今から思えば、どれもが楽しい事ばかりだつたんだよ」

そんなラッセンを見上げながら、アンジェレッタは少しだけ恥ずかしそうに囁きました。

「…そうね……」

再び、沈黙が一人を優しく包み込んでしまいます。その間も月は昇り続け、黙ってしまったアンジェレッタとラッセンにそつと青い波を送り出していました。

沈黙は、どれだけの間、一人の『言葉』を伝えたことでしょう。黄金の揺らめきに纏われた声無き存在は、一人の心をそつと往復しては、いつそうその煌きを増していきます。

その『言葉』に抱かれながら、やがて、ラッセンは大きな決心をしました。

静かに、ポケットの中に入れます。でも、驚いたことに、そこには目的のものしかありませんでした。あの、アンジェレッタのお兄さんからもらった紙切れが無くなっていたんです。

少し、手を止めてしまいます。でも、ラッセンは一人で小さく頷くと、そのまま手を握り締めてポケットから出しました。

ええ、ラッセンには、何だかあの紙が無くなつても当たり前のように思えたんです。あの紙は、もうラッセンのポケットに存在する理由が無くなつたんでしょう。

ラッセンは手をしつかりと握り締めたまま、その黒く澄んだ瞳に真剣な色を浮かべ、隣りに座るアンジェレッタを見つめました。

「アンジェレッタ……」

「どうしたの、ラッセン……」

清らかな青の瞳が、真つ直ぐに見つめ返してくれます。その前で、ラッセンは大きく息を吸い込むと……手をそつと差し出しました。

「これを……受け取つてもらいたいんだ……」

アンジェレッタは、そこに可愛らしい髪飾りを見付けていました。ええ……ラッセンがエルサ姉さんのために、何ヶ月もかかつて作り上げた、あの髪飾りなんです……

「ラッセン……！」

これは、ラッセンにとって、ものすごく大切ななんです。それを……

なんて言えばいいのか分からず……いるアンジエレッタの前で、ラッセンは静かに、ゆっくりと瞼み縫めながら言葉を紡ぎました。  
「僕は、アンジエレッタと一緒にいたいんだ……ずっと、ずっと一緒にいたいと思ってる……だから、今は、これをアンジエレッタに着けてもらいたいんだよ」

ええ……勿論、エルサ姉さんを忘れるつもりなんかありません。でも、姉さんは姉さん、アンジエレッタはアンジエレッタなんです。今は、ラッセンはアンジエレッタにこそ、この髪飾りを着けてもらいたかつたんです……

もう、それ以上はうまく声に出来ません。でも、『言葉』はラッセンが考えているよりも、もっと多くの事をアンジエレッタの胸に届けてくれました。

それでも……アンジエレッタはしばらぐ迷ってしまいました。自分に、この大切な髪飾りをもらつ資格があるんでしょうか……

アンジエレッタはその視線を手の中の髪飾りから、ラッセンの瞳へと移しました。そこには、深くて重い……今までに見たことが無いくらいに真剣な光が宿っているんです……

「…………」

黙つたまま、アンジエレッタはじつとラッセンの手を、自分の両手で包み込みました。そして、その手の温もりを惜しむように、ゆっくりと指を放してこきます。髪飾りを伴いながら……

微かに濡れた青い瞳は、じつと髪飾りを見つめています。

ラッセンも、何も言えません……

また、しばらくの時間が流れています。

やがて、アンジエレッタはその髪飾りを、左耳のすぐ上に留めていました……

ラッセンは、何も言えそうにないのに……でも、何とか言葉を見つけ出そうとしていました。そして、少し震えながら見上げてくるア

ンジエレッタに向かつて、ようやく短い言葉を押し出したんです。

「『大好き』だよ、アンジエレッタ……」

「……わたしもよ、ラッセン……」

頬を淡く染めながら、でもアンジエレッタは目を逸らさずに囁いていました。

ずっと、ずっと……二人は互いの瞳を見つめ続けています。

……やがて、アンジエレッタはそっとラッセンの肩にもたれかかっていました……

月の光は、新しい『時間』に改めて認められた二人を、その銀色の幕で柔らかく包み込んでいきます。アンジエレッタとラッセンの心中には、その波の煌きが、いつまでもいつまでも広がり続けていました。

『星空の駅』おわり

ふと、アンジェレッタは心地好い震動に気付いて目を覚ました。

青い瞳の中に、明るい光が射し込んできます。

いつのまにか、アンジェレッタは汽車の中へと戻っていたんです。でも、何かが違っています…床板は新しく、まだ、おろしたての匂いがしています。天井の明かりも、前より温かく、ずっと綺麗に輝いているんです。腰掛けている座席だって、ふんわりと優しくアンジェレッタの体を支えてくれていました。

車内だって、広くなつた気がします。でも、それなのに、昨日までの汽車と同じようにも思えるんです。

アンジェレッタがもつと周りを見ようと立ち上がりかけた時、すぐ隣りにラッセンの姿が浮かび上がつてきました。

…でも、ラッセンも少し変わったみたいです。前よりも、もつと優しさと力強さに満ち溢れているんです。その黒い瞳には、生命の煌きがいつそうの眩しさをもつて感じられました。

いいえ、ラッセンだって驚いていました。髪飾りを着けてくれているアンジェレッタが、何だかとつても美しく輝いて見えるんです。その体の内側からは、白く透き通つた光の波が流れ出しているような気がします。とつても、とつても…アンジェレッタは素敵に見えました。

黙つたまま、アンジェレッタは座りなおしています。その頬には赤みがさし、愛らしい口許には素晴らしい微笑が浮かんでいるんです。ラッセンも、そつと、静かにアンジェレッタの指先を取りながら微笑みました。

暖かくも寒くもない日の光は、南への道を辿りながら、大きな窓から中を覗き込んでいます。そこには、金色の波に洗われた、幸せな一人の姿が映し出されました。

汽車は、太陽の下に見える山々を手指して、次第に高原の中を走るようになつていきました。灰色の小さな石が積まれ、若々しく鮮やかな緑の牧草地を囲んでいます。所々にリンゴの木が立ち、その木漏れ日は草地に見事な絵を描き出していました。

でも、牧草地にも牛や羊といった家畜の姿が見えないんです。いいえ、それどころか、人の住んでいる家すら何処にも見つかりません。

「誰もいないのかしら……」

窓辺から覗くアンジェレッタがそう呟いた時、何か微かな音色が聞こえてきました。

「あれは……鈴の音だね」

ええ、そうです。今はアンジェレッタにもはつきりと分かりました。カラーン、ゴロン……大きな、のんびりとした鈴の音がするんです。あの鈴は、きっと牛の首に吊り下がっているのでしょうか。牛の姿は何処にも見えませんでしたが、アンジェレッタには、ゆっくりと草をはむ牛達の姿がはつきりと観えていました。

汽車は、黒いくらいに青い空の下を、涼しい風と共に走つています。窓を開けて首を伸ばすと、日映い陽射しの中で、行く手には雪をかぶった山々が見えていました。蒼く霞んだその峰の上には、純白の、田も覚めるような雲が幾つかぽつかりと浮かんでいます。汽車は、真っ直ぐにその山々へと向かつて進んでいました。

もう少しすれば、最初の山のふもとに辿り着くことでしょう。

アンジェレッタとラッセンは、ずっと手を握りあつたまま、並んで窓の外を眺めていました。

とっても高くて、いつたい何処にあるのか想像も出来ないような青空が、汽車の上に広がっています。見上げていると、気が遠くなりそうなんです。アンジェレッタは、ちょっと怖くなつて視線を下ろしてしまいました。

そんな空の青を映している瞳に、緩やかに右へと曲がっていく線路が飛び込んできます。進行方向から射してくる太陽の光に、その道は白く、銀色に輝いて見えました。丈の短い草々に囲まれ、他の何よりもくつきつと浮き上がつて見えるんです。その線路の脇には、濃い緑色の木々が、まるで絵のよつと立ち並んで風に揺れています。

何だか、夢の中でしか知らない景色みたいで。ほら、みずみずしい草葉に隠れて咲いている白や黄の小さな花なんて、まるで星のように光を放つていてどう? その星達は、通り過ぎていく汽車に向かつて、たくさんの色や輝きを見せてくれています。

…ええ、これはきっと『夢』なんでしょう。きっと、やつなんです……

でも……『夢』って何なんでしょう? じつして、ラッセンと一緒にいられる事も、『夢』なんでしょうか……

ちよつぴり恐くなつて、アンジエレッタはつないだ指先に力を込めてしまいました。

そうです……もしも夢なら……こつかは、覚めてしまつかも知れないとです……

「どうしたんだい? アンジエレッタ」

優しい声が、そつと包み込んでくれます。でも、アンジエレッタには応えられませんでした。こんな事を話してしまつたら、夢から覚めてしまいそなんです……

「この世界と『夢』とは、共に『回り』ものなのですよ、アンジエレッタ」

不意に、背中から重くて深い言葉が聞こえてきました。アンナさんは

すがるよつな表情で振り返つたアンジエレッタに、アンナさんは静かに微笑んでいました。

「『夢』は、それ自身が一つの世界なのです。そこへ入り込んだものが望まない限り、覚めることなどありません。『影』の世界で

は夢は覚めてしまつものですが、それは《本物》の『夢』ではなく、《影》の言葉に従えば『幻』なのです。この世界では『夢』は幻ではなく、『実際の世界』なのです。

……なら、安心してもいいはずです。だって、アンジエレッタは絶対にラッセンと一緒にいられるこの『夢』を、やめようなんて思わないんですから。

「……幻でなくて……本当に、よかったです……」

「え？」

きょとんとした顔で、ラッセンが覗き込んできます。その様子に、今度はアンジエレッタが驚いてしまいました。

「ラッセン、アンナさんのお話を聞かなかつたの？」

「アンナさんなんて、いないよ？」

ラッセンたら、そんな事を言つんです。ですから、アンジエレッタは通路の向こう側の席を示して…

でも、とつても驚いた事に、そこにアンナさんはいませんでした。

「アンナさん……」

何処に行つてしまつたんでしょうか。

「そこにいたんだね？」アンジエレッタ

「ええ……」

嘘じやありません。でも、信じてくれるでしょうか…

アンジエレッタが見上げる先で、ラッセンは柔らかく笑つてくれていました。

「じゃあ、アンジエレッタの『場所』とアンナさんの『場所』が重なつたんだね。だから、アンジエレッタには見えたんだ」

それ以上、ラッセンは何も聞いてきませんでした。アンナさんは、アンジエレッタだけに『何か』を話す必要があつたんです。それを、もしもラッセンにも聞かせたいのなら、きっと、アンナさんの姿はラッセンにも見えていたことでしょう。勿論、ラッセンはアンジエレッタが嘘をついているなんて、これっぽっちも思いませんでした。

「ありがとう…ラッセン……」

アンジュレッタも、小さくせつ笑いただけでした。

こんなラッセンと一緒にいられて《本当》によかったです…これが幻でなくて《本当》によかったです…

アンジュレッタは、心からせつ思つていました…

雪を戴く峰々の手前に、低くて小さな山が連なっています。その中の一つを、汽車は中腹田指してゆつくりと登り始めています。所々、薄い緑の敷布を裂いて、茶色い地肌が見えています。ほら、右手の谷底では、白くて清らかな雪も、まだ解けずに残つてゐんです。でも、この世界で、雪が降つたり融けたりするんでしょうか。南へと昇つている太陽からは、とても『冬』の気配なんて感じられませんでした。

「せつと、そうじやないと思つよ、アンジュレッタ。冬じやなくても、必要があれば、雪は降つてくれるんだよ」

「…ええ、そうね」

だつて、『時間』があるからこそ『冬』は巡つてくれるんです。

『時間』が無ければ、季節なんて生まれるはずがありません。

一人には、けつこうな急斜面に見える所を、汽車は着実に登つていきます。草々の間にはタンポポの花が咲いていて、それは黄色く愛らしい模様を描きながら青い山を彩つしていました。

少し、開けた所に出てきます。青く霞んでいた高い山々も、とつても近く感じられるんです。銀色の若肌の上で、白い雪のじゅうたんは眩しいくらいに輝いていました。

汽車の窓のすぐ下からは、タンポポが無数に咲き誇つています。黒いくらいに濃くて、でも明るい緑の葉をした森の傍まで、その金色の海は広がつているんです。燃え立つよつた金色の光は、涼しい高原の風に吹かれて、ゆつたりとした波を作り出していました。アンジュレッタは、その可愛い草原を微笑んで見つめていました

が、ふと何かに気付いて空を見上げました。

なんて透き通ってるんでしょう。本当に、この青空には果てなんて考えられません。きっと、この世界では《本当に》に何處までも続いているんです。すぐそこにもありそうなのに、でも、手を伸ばしても触れないんです。

自分の瞳にそっくりな青空へと目を向けた時、アンジェレッタはそこに小さくて、でもとっても鋭い『何か』を見付けた気がしました。じつと見ていると、それは光っているんです。星だつたんです！

アンジェレッタは、思わずどきりとして両手でラッセンの腕を掴んでしまいました。何だか、見てはいけないものを見てしまった気がしたんです。でも、目が放せません。ええ、どうしても放せないんです。

昼間の星は、とっても白く見えます。だからでしょうか、アンジェレッタにはこの青空が真っ黒な夜の闇に思えました。不意に、夜に引き戻された氣がするんです。

「アンジェレッタ……」

ラッセンの温かい声がします。でも、アンジェレッタには口を開くことも出来ませんでした。

「…どうして、こんなに美しく澄んでるんだろうね。雲だって、まるで水分を含んでないみたいだよ…星が見えたって、当然かも知れないね」

「ラッセン！」

アンジェレッタは驚くと、黒い瞳を見上げていました。ええ、そうなんです。ラッセンも、同じものに気付いていたんです。

「…わたし、見てはいけないものを見たんだと思ったの…でも、そうじゃなかつたのね…」

「アンジェレッタ……」

悲しそうに、アンジェレッタはラッセンに笑いかけていました。

「今まで、わたしが気付いていなかつただけなの…きっと、もっといろいろなことも、知らないでいたんだと思うわ……」

星の空にでも、その向こうでは星が煌いているんです。アンジエレッタは、今までその事を『本当』には知つていませんでした。同じようにして、いったいどれだけのことを見逃してきたことでしょう。「でも、それはこれから知つていけばいいんだよ。今までのアンジエレッタが間違っていたんじゃないんだ。自分ばかりを責めたら駄目だよ、アンジエレッタ……」

優しいんです……本当に、とっても優しいんです……

「……ありがとう……」

少し、清らかな青い瞳が濡れています。アンジエレッタは、視線を落とすと、ラッセンにすがりついていました。  
さまざまな色彩に埋もれながら、汽車は山の頂上を手指数して走っています。ゆっくりと、ゆっくりと……でも、着実に汽車は進み��けていました……

#### 『高原の汽車』 おわり

ところが、とても残念なことに霞が出てきたようです。左右に見えていた雪に煌く山々は、少しずつその姿を隠そうとしています。青かった空も、白くぼんやりとした雲で覆われてしまいました。

そろそろ頂点に辿り着こうとしていた太陽も、その光をうつすらと滲ませてしまいます。ちょっと悲しくなつて、アンジェレッタとラッセンは互いに顔を見合わせました。

汽車は、もう随分と高い所まで登つてきています。後ろを振り返ると、あの素晴らしい草原がとても遠くに見えるんです。木々も小さくて、まるで砂粒のようです。その薄い若葉色になつてしまつた草の原に、細く銀色に輝く線路だけが、一人の目にもはつきりと分かれました。

それでも、こんなに高い所まで来ているのに、あの虹の海は見えてきません。そんなにも遠い場所から、一緒に汽車で旅をしてきたんです。そして、その旅はもっともっと、これからも続いていくんです。二人で、一緒に……

それがどれだけ幸せなことか…ラッセンが瞳を下げる時、その視線はアンジェレッタの微笑みにぶつかりました。少し恥じらいながらも、ラッセンもアンジェレッタも、素敵な微笑を浮かべて小さく頷いています。ええ、そうですとも。ずっと、ずっと一緒になんですね。それが『本当』なんです。

その時、少し汽車の速度が遅くなりました。ゆっくりと、止まろうとしているんです。顔を出して前を見ると、白い柱の並ぶ小さな駅舎が一人の目に入りました。

「降りてみようか、アンジェレッタ」

「ええ」

アンジェレッタの細く美しい指先をしっかりと握りながら、ラッセンはすぐに通路に出て、広くなつた車内を扉へと向かいました。

外に飛び出した瞬間、爽やかな風に包まれます。駅を囲む草々も、その風に身をなびかせながら心地好い歌をうたつてゐるんです。…でも、駅の中は少しだけ静かな雰囲気に満ちていました。薄く力を弱めた太陽に照らされて、微かに輝いている純白の柱のためでしょうか。でも、その沈黙は恐いものではなく、温かな安らぎでいっぱいだったんです。

アンジェレッタとラッセンは、黙つて駅の外へと向かいました。左手に、今までずっと汽車が田指していた山の頂上が見えています。とっても短い草に覆われたその斜面は、簡単に登つていけそうな気がしました。

「行きましょう? ラッセン」

「よし」

ずっと、六年間も部屋から出られずにいたなんて思えない元気さで、アンジェレッタは歩き出しています。道なんてありません。でも、アンジェレッタにもラッセンにも、登つていくべき『道筋』は分かつていました。

強い風の下、一歩ずつ足を出していきます。小石が多く、思つたよりも歩きにくそうです。

「ほら、気を付けて!」

転びそうになつたアンジェレッタを、慌ててラッセンは支えいました。一人の手は、今もずっと離れずに互いを握り締めています。「ごめんなさい、ラッセン…」

小さな声に、ラッセンは快活に応えていました。

「ありがとう、だよ。アンジェレッタ」

「…ありがと…」

アンジェレッタは嬉しそうに微笑むと、ラッセンの手を、もつと強く握つていました。

すぐに、また歩き出します。急な斜面で幾度転げ落ちそうになつても、一人の指先は絡まつたまま、絶対に離れることはありませんでした。

もう、随分と登つてゐるんです。後ろを振り返つてみると、駅舎の白い屋根もとつても小さくなっています。停車している二両の汽車が、おもちゃのよつにしか見えなくて、ひょつとアンジエレッタは恐くなつてしましました。

急いで、前に向き直ります。すると、ハイマツのくすんだ緑色の群生が目に飛び込んできました。もう、すぐそこで幹を地面に這わせてるんです。の中に入つていくんでしょうか。道は無いのですから、作るしかありません。あのちくちくしそうな木の中に、道を作るんです…

ラッセンも、ちょっとと考え込んでいました。頂上は、右手に見えています。ハイマツは頂上のすぐ下辺りでは無くなつてゐるんです。あそこまで、回つては行けないのでしょうか。

じつと、回り道を探してみます。ここから見る限り、ラッセンには危険そうな所は見付けられませんでした。もう一度確かめてから、傍で待つてゐるアンジエレッタに振り返ります。

「アンジエレッタ、ここから真つ直ぐ右に曲がつて、遠回りをして頂上に行こうか」

「ええ

ラッセンは、きちんと自分の事も考えてくれて、そして尋ねてくれたんです。アンジエレッタは、すぐに信頼しきつた田で頷きました。

この山の尾根は、左の方から少しづつ上がって頂上に向かっていきます。一人はしっかりと手を握りあつたまま、その尾根から吹き下りてくる風に抱かれて右に曲がつて歩きました。

透明な緑色をした草々を踏むたびに、ふわっと強い香りが立ち上つてきます。風にあおられて地面に頭をつけようとしているのに、草の間から聞こえる歌声はとても優しくて心地いいものなんです。黒く豊かな髪を激しく乱しながら、アンジエレッタはその音色に耳を澄まし、そつと微笑んでいました。

やがて、頂上がすぐ上に見えてきます。もう、周りにはハイマツもありません。ここからは真っ直ぐ、あの頂上まで行けるはずです。

「もう少しだからね、アンジェレッタ」

「ええ。ラッセンこそ、大丈夫?」

自分をずっと風や小石から守ってくれていたラッセンに、アンジェレッタは心から心配して尋ねていました。でも、ラッセンは屈託も無く笑っています。

「平氣だよ。ありがとう、いつも心配してくれて」

慌てて、アンジェレッタは首を左右に振っていました。そんな、ラッセンを心配するなんて『当然』なんです。

ラッセンは、いよいよ微笑みを深めています。その幸せそうな笑顔に、アンジェレッタも嬉しくなつてこれ以上無いくらいに素敵な笑顔を浮かべていました。

並んで、頂上へと足を踏み出します。幸運にも、灰色の石が少し不規則な階段を作ってくれているんです。アンジェレッタとラッセンは、交互に足場を確かめながら、慎重に一歩ずつ登っていました。

もう少しで頂上です。ラッセンはその視線を下ろした後、今までのようになにかかけていました。

でも、その石はしつかりと土の中に入つてなかつたんです! ぐらつと大きくラッセンの体が揺れたかと思うと、石と一緒に落ちていこうと……

「ラッセン!」

アンジェレッタは、両手でラッセンの手を掴むと、必死になつてしがみついていました。目をきゅっと閉じて、力いっぱい、ラッセンの手を握り締めているんです。自分も下に落ちそうになりながらも、アンジェレッタは決して手を放そとはしませんでした。

不意に、力が抜けてしまいます。アンジェレッタは、まだしつかりとラッセンの手を掴んでいることを確かめながら、こわごわと黒

い瞳を開けました。

田の前で、ラッセンが感謝の色を満面にたたえて笑っています。ええ、ちゃんと傍に立つていてくれたんです。アンジェレッタはその無事な姿を見ても手を放さず、ちょっとびり涙を流してしまいました。

「ごめんね、アンジェレッタ。大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫です……」

ラッセンが無事でいてくれたのが嬉しくて……でも、さつきの場面はとても恐くて……アンジェレッタは、しばらく声も出さずに泣いていました。その時、しっかりと握っていた両手の上に、温かなものが添えられます。霞んだ目に見えたのは、ラッセンのもう片方の手でした。

「ありがとう……ありがとう……」

ラッセンの、真剣な咳きが聞こえきます。

二人は、しばらくそのまま動こうとはしませんでした……

ようやく、頂上に辿り着きます。でも、その途端、アンジェレッタとラッセンは物凄い風に吹き飛ばされそうになりました。登つてきた斜面の反対側は、とても切り立った崖になっているんです。はるか下の方から、風は容赦なく吹き上がってきます。一人は急いで、傍に幾つも立つていた黒い石に掴まりました。これで、やっと周りを眺める事が出来ます。

「わ……あ……」

そんな声を漏らした後、アンジェレッタもラッセンも、もう一言も口にすることは出来ませんでした。

なんて、素晴らしい風景なんでしょう！ 風が駆け昇つてくる崖の下には、とっても大きな森が広がっています。その淡い緑色の波は、左手に見える山並の裾野を緩やかに覆つた後、遠くにそびえる雪山まで延びているんです。雪山の広い足元は白く霞み、上へ行くほど少しづつ青みを取り戻しながら、柔らかく一人の視線を受け止

めていました。

そこから右手は、ずっと白い幕に隠されて、何も見えていません。まるで、風に流れる海みたいで。黒い岩にしつかりとしがみつき、片手にはアンジエレッタの指先を握り締めながら、不意に、ラッセンはその白い波の向こうに美しい山脈を認めていました。

たなびく靄の中から、青く染まった山頂が姿を現しているんです。その素肌には汚れ一つ無い、純白の雪のレースが掛けられています。なんて美しいんでしょ？…その山々は静かに、ただ黙つて佇んでいます…

（綺麗だね…）

まるで、アンジエレッタみたいで…  
でも、ちょっと冷たいかも知れません。いいえ、優しくも見えます。

ラッセンには、どんな『単語』で表現すればいいのか分かりませんでした。それなのに、山脈はあらゆる『言葉』で話しかけてくるんです。そつと、深く、厳しく、慎ましやかに…

「…きっと…神さまは、あんな素敵などこかに住んでおられるのね…」

アンジエレッタの、とっても微かな声が聞こえます。目にすることは出来るのに、あの山々はどんなに遠く離れてこることでしょう。

アンジエレッタの青い瞳には、いつしか憧れの光が浮かび上がっていました。

「行つてみたいね…」

ラッセンも呟いています。アンジエレッタは、その言葉が嬉しくて、そつと握った指に力を込めていました。あの厳かで美しい峰に、いつか行くことが出来るのなら…

…ええ、勿論…それは、ラッセンと一緒に、です…

その時、不意に一人の胸の中で『何か』がはつきりと湧き上がつてきました。その『何か』は『声』になつて、アンジエレッタとラ

ツ センに話しかけています……

（きっと、行けるんだ。…アンジエレッタと一緒に……）

ええ、そうです。きっと、そつなんです。

『時間』の無い世界に、『いつか』なんてありません。ですから、『いつか』行くことが出来るのなら、それは行かなくてはならない時に、必ず行くことになるんです。

そして、アンジエレッタもラッセンも、あの山へと行かなくてはならない……そう、『声』は約束してくれました……

青く澄んだ瞳も、黒く輝く視線も、共に白い靄に覗く山並から動こうとはしません。でも、雪に煌く山脈を見つめたまま、無数の黃金色の『言葉』は一人の間を行き交い、音も無く銀色の光を放ち続けています。

指先は強風にも負けず、これ以上無いくらいにしっかりと、互いに絡み合っていました……

## 『風の山』おわり

どれくらいの間、白く霞んだ太陽の下で、あの雪を戴く山々を見つめていたのでしょうか。

アンジェレッタには分かりませんでしたが、気付いた時には縁の斜面を駆け下りて、汽車の中に乗り込んでいました。

温かな手を指先に感じながら、アンジェレッタが席に座つたと同時に、汽車は音も無く静かに駅舎から離れていきます。窓から外を眺めてみると、背の低い草に覆われた山が、少しづつ後ろに遠ざかっているんです。

風の柔らかな指に豊かな黒髪を遊ばせながら、アンジェレッタはあの素敵な景色を見せてくれた山を、淡い青に染まっていくまですつと見つめ続けていました。

汽車は緩やかにうねる丘の間を、北へと向かつて滑つていきます。やがて、風の舞う峰々は、他の背景の山々へと溶け込み、緑の丘に隠されてしまいました。

何だか、とつても悲しくなつてしまします。あの素晴らしい風景は、もう一度と田にすることが出来ないんです。もつ一度、見てみたい……いつか、帰つてきたい……でも……

清らかな光が、黒い瞳に溢れます。その時、ラッセンの声がすぐ隣で聞こえきました。

「アンジェレッタ……悲しまなくてもいいんだよ。この世界には、『場所』すら無いんだ。だから、いつでも、必要になれば……あの山に出来逢えるはずなんだからね」

「ラッセン……」

その深くて優しい言葉にアンジェレッタは振り返ると、そつとラッセンの腕に額を押し付けていました。

小さく細い肩が、微かに震えています。腕に熱い流れを感じながら、ラッセンはその肩に手を置いて囁きました。

「その時にはね、あの山も姿を変えてるかも知れない……でも、《眞実》に比べたら、その姿なんてどうでもいいことなんだよ……」

大丈夫。一緒に行けるよ。忘れずに、信じていたらね……」

ええ、勿論、忘れたりしません。そうです、絶対にあの山上で見た景色と《声》……そして、ラッセンを忘れたりするものですか……」

「ありがとう……ラッセン……」

いつも、そう言つてゐる気がします。でも、もつともつと、たくさんのこと話をいたいんです。なのに、こんな時には、どんなにアンジェレッタが望んでも、声は何一つ伝えてはくれません……それらの事をこそ、アンジェレッタは本当に伝えたいのですが……

でも、アンジェレッタがそう思つた瞬間、ラッセンがそつと言つてくれました。

「アンジェレッタ……ありがとう……」

ちょっとどびつくりしてしまいましたが、すぐに嬉しさが込み上げてきます。小さな胸の中に、黄金色の澄んだ波が満ちてくるんです。その《力》に素直に従つて、アンジェレッタは顔を上げました。

健康的になつた白い頬に、綺麗な微笑みが浮かんでいます。その笑顔を見て、ラッセンは自分でも驚いたことに、そつとアンジェレッタの額にキスをしてしまいました。

すぐに、透き通るような頬に赤みが差し、その赤みは喉元を下りたかと思うと、次には純白の服の中へと入つてきます。黒く濡れた瞳が下を向き、アンジェレッタは恥ずかしそうに身を縮めてしまいました。

でも、嬉しいんです。とつても嬉しいんです。たつた一つの出来事なのに、無数の『言葉』がラッセンの心から流れてくるんです。アンジェレッタには、それがはつきりと分かりました。

だから、はにかみながらも、アンジェレッタはもう一度ラッセンの目を見上げることが出来たんです。

「……ありがとう……」

こんな自分を『好き』になつてくれて、《本当》にありがとうございます……」

アンジエレッタは、それ以上何も言わずに、そつとラッシュセンにキスを返していました…

空を等しく覆っていた霞が、少しづつ動いています。風の銀色の手でかき回されて、あちこちに濃淡が出来てきるんです。渦を巻いて流れる白い毛布の隙間からは、やがて深い青空が覗き出していました。

太陽も、汽車の後ろの方でようやく顔を出しています。でも、何だか変なんです。だつて、ラッシュセンとアンジエレッタが山に登り始めた頃にも、太陽は南の空に掛かっていました。なのに、太陽は未だにそこにあるんです。北へと向かっている汽車の中からは、もうとっくに山は見えません。いいえ、それどころか、もう汽車は草原まで戻つてきてるんです。

きっと、太陽はまだまだ西の空に下りたくはなかつたんでしょう。淡い緑色の平原を眺め、時々現れる灌木に目を止めながら、何だかアンジエレッタは眠くなつてしましました。

まるで、夢の中によるよくな気分です。アンジエレッタは、柔らかな笑顔を大切なラッシュセンに向けながら、そう口にしていました。

「これが全部『夢』なら、僕達もそうかも知れないね…」

その言葉を聞いて、アンジエレッタはちょっとびっくりしていました。

それは困ります。『夢』ならいつか覚めてしまふのではないかでしょうか。ラッシュセンとも、一緒にいられないかも知れません。いいえ、一緒にいたいと思っている、この『自分』さえいなくなるかも知れないとです…

『夢』と『自分』の『差』なんて、何処にあるんでしょう？ やっぱり、じつしてアンジエレッタと同じ大きさになつているラッシュセンも、『夢』なんでしょうか…

（でも…）

ええ、例え『夢』のラッシュセンでも、アンジエレッタは一緒にいた

いんです。それが覚めないのなら、アンジョレッタにとっては、自分達やこの世界が『夢』であっても別に構いませんでした。

でも……『本當』にこれが『夢』なら……

……覚めるにとはないんでしょ？

少し前に、アンナさんはアンジョレッタが望まない限り、『夢』は覚めたりしないと言つてくれました。でも……何故か、不安なんです。アンナさんを信じていらないわけではありません。いいえ、アンナさんの言葉は、信じるとか信じないとか……そつ四つものではないんです。

でも、アンジョレッタには、その言葉の『本當』の『意味』を知る事が出来なかつたのでしょうか。

……いいえ、『本當』の『夢』を前にして、困惑つていたのかも知れません。

何だか、急に眠れなくなつてしまひます。

なかなか下りよつとはしない太陽と、その光に照らされた草原とをぼんやりと見つめながら、アンジョレッタはずつと考え込んでしまいました。

ちつとも太陽が動かさないの、もうどれくらいの間、こいつして草原の中を走つているのか分からなくなつています。何処までも透き通つた青い空の中でも、点々と白く輝く雲がじつと流されずに漂つているんです。後ろへとあつと言つ間に滑つていく草原では、木々の影が少しも転がつてはいませんでした。

動いているのは、この汽車と風だけです。でも、この汽車も風も、ずっと止まつていることなんて無いんです。それは、ずっと静止していることと変わらないのかも知れません。

ラッセンは、そんなことをぼんやりと考えながら窓の外を眺めていました。

青白い花が、線路に沿つて並んでいます。その向こうでは、明るい若葉色の草々が、そよ風になびいて白や黄の可憐な花を時々隠しているんです。春に萌え出た葉を失つていかない樹は、そのしなやか

な枝を風の子ども達に遊ばせながら、小さくなるまで汽車を見送つてくれていました。

その時、行く手に何か灰色のものが見えてきたんです。あれは、いつたい、何でしょう…ラッセンは、黒い瞳をじっと凝らして見つめしていました。

草の海の上に、灰色の円柱が立ち並んでいます。建物の柱でしょうか。次々に、幾つも見えてくるんです。黒いくらいの青空を背にして、灰色のくすんだ列柱は、汽車を阻むかのように立ち並んでいました。

「何かしら…」

アンジエレッタも、少し考え方を止めて窓の外に首を出しています。二人が顔を見合させて、再び視線を前に向けた時、アンジエレッタもラッセンも同時に声を上げていました。

「あっ！」

崩れかけた柱の群れの足下に、青く深い湖が見えてきたんです。白雲を写している波一つ無い静かな湖面は、まるでもう一つの空みたいですね。

アンジエレッタとラッセンが互いの瞳を見つめた瞬間、二人はまた驚いて叫んでしまいました。

いつのまにか、二人はしっかりと手を握りあつたまま、汽車から降りていたんです。短い草が、そつと足首をくすぐっています。心地好い香りが辺りに漂い、相変わらず空の上の方で輝いている太陽と共に、果然としている一人を温かく包み込んでいました。

目の前には、向こう岸なんて全く見えないくらいに大きな湖が広がっています。その岸辺には、青草に囲まれて古い石の柱がたくさん並んでいるんです。

…なんて静かなんでしょう……湖面には、漣一つ見えていません。風にさえ、まるで動こうとしていないんです。湖は、ただ、そこに存在しているだけでした。

この、すぐ傍にある列柱だってそうです。影一つ動かさず、物音

一つたてるわけでもありません。この柱も、昔は誰かの家だったのでしょうか。それとも、市場を囲んでいたのかも知れません。アンジェレッタの田には、かつてこの柱の下で歩いていたであろう人々の姿が見えるようでした。

でも、それだって静かなんです。今は、この柱だって、黙つて一人で立つていてるだけです。何処か懐かしいのに、アンジェレッタとラッセンにとって、この風景はあまりにも孤独でした…

その時、思つたんです。こうして湖畔に立ち尽くしている『自分』だって、ここに存在しているだけなんです……この遺跡が、すでに終わってしまった『夢』の名残であるなり……『自分』との違いなんて、いつたい何処にあるのでしょうか？

ちょっと視線を落とした先に、しつかりとつないでくれているラッセンの手が見えています。…そうです。確かに、『自分』も『夢』なのかも知れません。でも、この遺跡とは違うところが一つだけあります。

ええ、アンジェレッタは孤独ではなかつたんです。

でも……やっぱり、いつか、この遺跡のように『自分』の『夢』は終わつてしまふのかも知れません。それが悲しくて……いいえ、恐くて……アンジェレッタはラッセンをそつと見上げていました。

ラッセンは、につこりと笑いかけてくれます。そして、優しく頬に手を添えてくれました。

「アンジェレッタ……『夢』には終わりなんて無いんだよ。ほら、見てごらん。この石の柱は一度終わった『夢』だけど、それは今、僕達の『夢』の中に存在しているんだ。だからね、多分……僕達も、誰かの『夢』の中に存在しているのかも知れないよ」

「ラッセン……」

ええ、そうかも知れません。そして、『夢』が『夢』の中で続くのなら、それは無限に続く『永遠』なのです。いいえ、それは続く続かないの判断さえも越えたものなのでしょう。もしもそつなら、決してこの『夢』は覚めたりしないんです。

少し、嬉しくなってきます。でも、ちょっと、まだ心配なんです。そんなアンジェレッタの心を観て、二人を夢見ている《存在》は『』の静かな『夢』の《本当》を少し示そうとしました。

まるで動こうとしない青い湖面は、何も変わらずに広がっていました。でも、『何か』が動き始めているんです。アンジェレッタもラッセンも、その『何か』に気付くと、息をのんで次の動きを見守りました。

不意に、水面から微かな歌声が湧き起じてきます。澄んだ『言葉』は、緩やかなメロディーに乗って青空へとどんどん昇っていくんです。でも、アンジェレッタに届けられた歌声は、決して『音』ではありませんでした。あの、心の奥から響いてくる《声》のようです。それに…ちょっとアンナさんの『言葉』にも似ているかも知れません。

一人には、とっても残念なことに歌声の意味は分かりませんでした。でも、優しく柔らかな力が胸の中に広がってくるんです。…え、今ではアンジェレッタにも分かっていました。この風景は、この『夢』は、今もまだ続いているんです。『夢』には終わりなんてありません…少し姿を変えるかも知れませんが、それは常に『たつた一つ』なんです。

アンジェレッタがそう思つた瞬間、歌声に導かれるように遺跡の柱の群れが輝き始めました。月の光のように銀色の透明な輝きは、柱の内側から溢れ出し、汚れた表面を走つたかと思うと…

「……！」

柱の中の銀色の光は、次の瞬間、大きく弾けていました。すぐ傍らに立つていたアンジェレッタとラッセンはもちろんのこと、辺りの大気も《永遠》の輝きに飲み込まれてしまいます…

その、とっても力強くて温かな光の渦に抱かれながら、一人はそつと幸せそうに目を閉じていきました。

『湖畔の遺跡』 おわり

「……んつ……」

微かな震動が伝わってきます。優しいその揺れは、アンジェレッタの体をそつと包み込んでくれていました。

愛らしい瞼が震え、ゆっくりと青く清らかな光が覗きます。形良く調った指先で目をこすると、アンジェレッタの視界には微笑むラッセンの姿が飛び込んできました。

「目が覚めたかい？ アンジェレッタ」

素晴らしい笑顔が満面に広がってしまいます。心からの幸せに満ちた微笑は、周りのあらゆる存在に喜びを与えていきました。

「…？ ねえ、ラッセン。また汽車が大きくなつたのかしら」

ええ、ほんの少しだけ大きく、新しくなつた気がします。天井の光は、今や汽車のあちこちから、うつすらと流れ出していました。

「そうみたいだね。でも、やっぱり同じ汽車なんだよ」

「ええ」

しつかりと、まだつながれている手の温もりを感じながら、アンジェレッタは嬉しそうに頷きました。

につつこと、微笑みを交わします。そのまま、一人は一緒に窓の外へと目を向けました。

太陽は、温かくも寒くもない光の腕を伸ばしながら、ようやく西方に向かって転がろうとしているようです。今、その姿は汽車の左手に見えていました。

空には、雲さえ消えてしまっています。何も無いんです。そこには、何処までも広がる、深い青の底無しの海が天を覆つているだけなんです。

汽車の周りには、さまざまな濃淡のある草原が続いています。色とりどりの花が、不意に現れては後ろへと遠ざかっていくんです。今までにも、同じ景色を随分と見てきました。

…でも、何かが違うんです。

「ラッセン…聞こえる……？」

「うん、聞こえてくるよ」

一人の心の中に、少し前に聞いたあの歌が溢れ出してくるんです。それは、鮮やかな花の群れが通り過ぎる度に音色を変え、美しいメロディーを奏でていきます。胸の中の透明な音楽に耳を澄ませながら、アンジエレッタとラッセンはぼんやりと窓の外を眺めていました。

風が、そんな二人にそつと触れては通り過ぎていきます。銀色の乙女達は、その腕に一人の音楽を抱き締めると、ありとあらゆる存在に聞かせようと、急いで旅を続けてきました。

もつ、ラッセンはこの世界の《全て》を受け入れていました。ここに、こうしてアンジエレッタと共にいる…それこそが、ラッセンにとっての《全て》だつたんです。それ以外の《本当》はありませんし、それ以上の《真実》もありませんでした。その、『たつた一つ』が《全て》であり、その他には何も存在していないんです。

アンジエレッタにしても、同じ気持ちです。周りがどれだけ変わつても、それはただ姿や形が変わっただけなんです。それは結局、『たつた一つ』でしかありません。それらは全て、ラッセンと一緒にいることから生まれるんです。アンジエレッタにとって、それらはラッセンと『同じ存在』でした。

そして、二人が一緒にいるからこそ、この世界は存在しているんです。『二人』こそ、実は『たつた一つ』なんです。

アンジエレッタの細くしなやかな指先は、ラッセンの逞しい指としっかりと絡み合っています。そこから銀色の月は生まれ、二人の心中へと流れ込んでいくんです。

ええ、そうです。ここにこそ、《全て》は存在していました……

まるで何かに呼ばれているように、汽車は西の空に向かって走つ

て行きます。太陽も、やつと半分まで落ちていました。でも、ちょっと休憩しているように思えます。それとも、まだ西の地平線には沈みたくないんでしょうか。

何かが、この行く手に待つていてる気がします。今までは、景色の方が一人に近付いてきたんです。でも、今度は違います。何かがアンジェレッタとラッセンを待つてくれているんです。今度は、そこへと向かって、一人が近付いていく番でした。

その時、急に汽車の速度が落ちました。ええ、ほんの少しでした。が、何処かに停まろうとしているみたいなんです。

アンジェレッタとラッセンは、互いの瞳を覗き込むと、次には窓の外に身を乗り出していました。

陽光に照らされ、汽車の向かっていく先には濃い緑色をした森が横たわっています。枝の先端に広がる若葉が、きらきらと鮮やかに輝いているんです。一つではない、さまざまに縁に染まるその森は、北から南へと草原の中を壁のようにずっと伸びていました。

「すごいね。ねえ、アンジェレッタ。あの森の中には何があると思う？」

ラッセンの声が、耳元を通り過ぎる風のおしゃべりにも消されず、心まで届いてきます。アンジェレッタは、楽しそうににこりと微笑むと、ラッセンに応えていました。

「とても明るい木漏れ日の中を、きっと、綺麗な小鳥達が歌つているわ」

「きっと、そうだよ。それに、おしゃうな木の実も、たくさん落ちてたらしいな」

アンジェレッタは、そんなラッセンの言葉にくすくすと笑い出しています。ラッセンも、その澄んだ美しい音色に合わせて笑い声を上げていました。

森は、刻一刻と二人の汽車に近付いてきます。ほら、鮮やかな色の服を着た、可愛らしい小鳥達が見えてきました。青くて長い尾をしたものや、赤くて眩しい胸をした小鳥達がたくさん舞っているん

です。その数は、汽車が森の中に入ると、もつともつと増えていました。

とても太い幹をした木々が、頭上のずっと上方まで真っ直ぐに伸びています。その先で枝がぱあーっと花開き、淡い黄緑の葉が微妙な濃淡を描きながら広がっているんです。その縁の天井から、光の泡粒は二人の髪の毛へと降り注いでいました。

斜めに射し込む光の薄い幕に溶け込み、小鳥達は軽やかに飛んでいきます。その小さな体からは、澄み切つたさえずりが次々と零れ出してくるんです。うつとりするような、その柔らかな音色に耳を澄ませながら、アンジェレッタは瞳を軽く閉じてしまいました。

木々の下を、無数の小鳥達が渡っていきます。その影が通り過ぎる下生えの間には、大きくて丸い木の実がいっぱい散らばっています。その木の実を避けながら、ガラスのように透き通った小川が汽車に寄り添つてさらさらと流れていきました。

「あの小川は、きっと湖につながってるんだよ」

ラッセンの声に目を開けると、アンジェレッタも美しい小川の水を見て嬉しそうに頷きました。

「森を出たら、大きな湖が広がっているのね」

「水鳥の群れがいて、魚もたくさん跳ねてるんだよ」

ラッセンの言葉が終わらないうちに、ゆっくりと走る汽車は突然森の外に飛び出していました。

ちょっと眩しくて、瞳を一瞬閉じてしまします。でも、すぐに目を開いた二人は、そこに広がっていた景色に息を飲んでしまいました。

青く澄んだ、それは大きな湖が線路の南に広がっていたんです。森の木々は岸辺まで押し寄せていて、漣がその太くて滑らかな幹にゆらゆらと光の波を映しています。汽車の下からは、白く輝く砂浜が波打ち際まで続き、その沖合いでは水鳥達の群れがのんびりと漂っていました。

風に遊ばれ、波が優しく打ち寄せていました。心地好い音楽が空中

に満ち溢れ、その水の囁きは楽しい笑みを導いてくれるんです。胸の中から溢れる一人の笑い声に合わせて、湖面では魚達があちこちで飛び跳ねていました。

「素敵な所ね……」

「今度は何があると思う?」

「ラッセンは、何が見えてくると思つの?」

ふわっと零れる素晴らしい笑顔に、ラッセンはこじこじして言いました。

「そうだね。牛がたくさんいる、真つ青な牧場じゃないかな」

その言葉が空中に散つた瞬間、大きな湖は終わり、田の覚めるような若々しい草に覆われた牧場が広がっていました。

窓のすぐ下では、湖から溢れ出した小川が、やっぱり汽車の進む方向へと流れていきます。その水面に頭を垂れた青草は、南北の地平線までずつと広がっています。豊かな牧場の中には点々と白斑が

散らばり、温かな日差しの中でのんびりと草を食んでいました。

そんな牛達を見ている一人の耳に、不意に風が美しい鈴の音を届けてくれます。カラーン、口ロノ… ゆつたりとした音色です。アンジエレッタには、牛の首に下げられている、鈴の揺れる様子が田に見えるようでした。

心が、ここの素敵な青空へと溶け込んでしまったそうです。柔らかな鈴の音色を近くに、遠くに聞きながら、ラッセンはぽつりと呟いていました。

「馬に乗つたら、こんな気持ちになるのかな…」

頬に当たる風を感じながら、夢を見るような口調でラッセンは囁いていました。アンジエレッタも、そんなラッセンを見上げて頷きました。

「とても気分がいいわ」

その時、急に二人の視界に一頭の駆けている馬が飛び込んできました。驚いて牧場を見ると、そこには純白の体を輝かせた馬が軽やかな足取りで走っていたんです。汽車と競争でもするように、銀色

のたてがみをなびかせ、楽しそうに跳ねています。ひづめはしつかりと大地を叩き、馬体は陽光によつてその煌きを微妙に変化させていました。

わくわくしてきます。なんて素敵なんでしょう！　もう、すつかりアンジエレッタとラッシュンは一頭の馬とお友達になつていきました。でも、残念なことに、汽車の方がちょっとだけ速かつたんです。馬は、少しづつ後ろに退がつていき、やがて二人の視野からは消えてしました。

今度は、いつたい何が現れてくるのでしょうか。アンジエレッタの青い瞳は、汽車の行く手にじつと向けられています。きっと、次は家があるはずです。赤い屋根をした、可愛らしい家が……

ほら、見えてきました。ええ、考へていた通り、真つ赤な屋根をしています。石を積んだ壁には、白いペンキが塗られているんです。

「大きな窓があるだろうね」

ラッシュンの言葉と同時に、アンジエレッタの目には大きくて花の飾られた窓が見えてきました。桃色の可愛い花が、窓辺いっぱいに咲きほこっています。なんて素晴らしいんでしょう。そうですとも、アンジエレッタが望んでいた家は、ちょうどこんな感じのものでした。

緑の草原に立つ家を見ながら、ラッシュンも想像していました。きっと、あの家の裏手には小さな果樹園があつて、丈の低いりんごの木がたくさん植えられているはずです。だつて、白い花でいっぱいの果樹園が、とっても似合いそうな家なんですもの。

黒い瞳には、その瞬間、思つていた通りのりんごの木の青々とした若葉が映つていました。甘くて素敵な香りまでもが届いてきます。緑の葉影では、丸々とした金色のりんごが、光の泡粒に照らされそつと瞬いています。銀色の風は、その葉と実と花を一度につけて木に優しく触れると、辺りに素晴らしい薰りを運んでいました。

「ほら、見て」

アンジエレッタの指差す先では、一人があつたらいいな、と思つた大きさの烟が広がつています。そこでは、二ワトリが一生懸命何かをついばんでいるんです。白く輝いているその体は、ちょこちょこと愛らしい仕草で烟地の中を歩き回つていました。

澄んだ水を湛えて、細い小川は汽車を映して流れて行きます。その心地好い瞬きに包まれながら、アンジエレッタとラッセンは顔を見合わせていました。

「こんな家に、住みたいね……」

「ええ……」

勿論、ラッセンと一緒に、です……

心からの《本当》の願いを一人が『言葉』にした瞬間、汽車はゆっくりとその白い家の前で止まつてしましました。

驚いて口を閉ざした二人の心に、深くて優しい女性の声が響いてきます。

……お帰りなさい……アンジエレッタ……

……お帰りなさい……ラッセン……

アンナさんの《声》なんです。なんて静かで、大きくて……でも、なんて温かくて柔らかいんでしょう！　アンジエレッタとラッセンがその言葉を胸の中で繰り返した途端、次には一人はさやさやと風に揺れている草の間に立つていました。

すぐ目の前では、明るい日差しに照らされて、白い壁が煌いています。風の歌や甘い香りも、汽車の中で感じていた以上にしつかりと一人を包み込んでくれるんです……

ふと、アンジエレッタとラッセンは、音にならない《声》に気付いて後ろを振り返つていました。

「きやつ……」

アンジエレッタが小さく悲鳴を上げて、愛らしい手で口許を押されています。もう、そこには汽車なんて無かつたんです。あんなに長い間一緒にいた汽車は、もう何処にも、影も形もありませんでした。いいえ、汽車だけではありません。見れば、今まで続いていた

線路も、そして、これから先に伸びていた線路も消えてしまったんです。もはや、二人の周りには《道》なんて何処にも存在していませんでした。

「やあ、ようやく着いたようだね。ようこそ、レフリゲリウムへ」何も言えず、動くことも出来なかつた二人の背へと、落ち着いた声が届けられます。慌てて振り返つてみると、果樹園の方から黒い髪をした少年が二人に近付いてきました。

澄み切つた青い瞳が、アンジュレッタとラッセンを見て、そつと瞬いています。その雰囲気がアンジュレッタに似ていることに気付くや否や、ラッセンは不意にずっと昔の出来事を思い出していました。

「フィオラ！」

「え？」

ラッセンの言葉に、アンジュレッタは呆然として目の前の少年を見つめています。では、このにこやかに微笑んでくれている少年が

「……お兄……さま？」

「お帰り、アンジュレッタ……」

「お兄さま！」

そつと手が離れていきます。今まで、ずっとつながっていた細い指先は、ラッセンの手の中から抜け出すると、フィオラの体をしっかりと抱き締めていました。

フィオラも、優しく受け止めています。嬉しくて、嬉しくて……ラッセンはそんなアンジュレッタの姿を見ながら、その頬にいつまでも涙を流し続けていました。

爽やかな風が、そつと優しく触れては三人を包み流れてきます。その風の乙女達は銀色の糸を引きながら、何処までも何処までも青空の下を舞い踊つていきました……

ちょっと、心が落ち着いてきます。

アンジョレッタは濡れた瞳でフイオラを見上げると、ふわっと優しい微笑みを零していました。

「本当に待つていて下さったんですね、お兄さま…」

「そうだよ、アンジョレッタ。よく来てくれたね」

大きな両手が、細い肩を抱いてくれます。アンジョレッタはその温もりが嬉しくて、また泣き出しそうになつていました。

もう、決して会えるとは思わなかつたお兄さま……

「お兄さまと、こうしてお話出来るなんて…」

「レフリゲリウムでは、別に不思議でも何でもないんだよ」

「…………こは、レフリゲリウムと言うのですか？ お兄さま」

アンジョレッタもラッセンも、初めてこの世界の名前を耳にしました。

「そうだよ、『影』の言葉で言えば『重ね合わせの国』になるだろうね。でも『本当』は、この世界もまだ『途中』でしかないんだ。僕達は、重なり合つたもつと大きくて眩しい世界へと入つていかなくてはならないんだよ」

そこで、フイオラは少しだけ寂しそうな顔をしました。

「アンジョレッタ。こうしてせつかく会えたのに、僕は今すぐ旅立たなくてはならないんだ。もつと広い世界に入るようにな、『声』が呼んでくれたからね…」

「お兄さま……」

アンジョレッタは、びつくりして…悲しくて、ちょっぴり涙を流してしまいました。

「でも、『本当』は分かつています。必ず、お兄さまとは再び会えるんです。『時間』の無い世界では、その間の空白なんて存在しません。

ですから、アンジョレッタはすぐに泣きやんで、微笑みを浮かべることが出来たんですね。

「待つていて下さいね、お兄さま…」

「ああ、待つていろよ。こつまでも」

フィオラは笑顔でそう言うと、アンジェレッタとラッセンを可愛らしい家の前まで導きました。

「これから、ここが君達一人の家になるんだ。気に入つたかい？」

「うん！」

大きく二人は頷いています。でもその時、ふとアンジェレッタは今まで思いもしなかつたことに気付いて呟いていました。

「でも、お母さんやお父さんは……」

ええ、そうなんです。アンジェレッタが戻らなければ、悲しむんじやないでしようか……

その呴きに、温もりに満ちた微笑みを浮かべると、フィオラは静かに言葉を紡きました。

「……分からなかつたのかい？」

優しい『言葉』が流れ出しています。

不意に、アンジェレッタとラッセンの胸には、抑えられない期待が、僅かな不安に縁取られながらも、大きく大きくふくらんできました。

「そう、確かに君達は『影』の言葉で言えば『死んだ』んだよ。ラッセンは崖から落ちて……アンジェレッタはベッドの上で……

……『夢』は覚めたんだ。今こそ、『本当』の『朝』が始まるんだよ」

フィオラの姿が、どんどんと薄れていきます。

やがて、黄金色の太陽の光はその淡い微笑みを揺らめかせ、銀色の風がそつと静かに運び去つてしましました。

……アンジェレッタの指先は、再びラッセンの手を探していました。温かな手が、しっかりと握り締めてくれます。

二人は黙つたまま微笑みを交わすと、互いに手を取り合つて、新しい家の中へと駆け込んでいきました……

『永遠』に続く幸せな物語を、一人は今、銀の流れと共に創り始

めたのです……

そして……扉は閉じられました……

『月の家』 おわり

レフリゲリウム

そは 時間の鎖と 久遠の海

一つを結ぶ 黄金の鍵

『レフリゲリウム物語』 おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7407c/>

---

レフリゲリウム物語

2010年10月8日15時04分発行